

雪国民俗

(第33号)

雪国民俗

第三十三号

雪国民俗館（ノースアジア大学・総合研究センター内）



雪国民俗館

（ノースアジア大学・総合研究センター内）

雪国民俗 (第三十三号)

はじめに

「雪国民俗 (第三十三号)」は、シテイカレッジ二〇〇七 (ノースアジア大学総合研究センター) の講演会並びにシンポジウムの「観光と民俗を考える―男鹿市の観光振興を事例として―」を特集することとした。参加した方は収録内容から新たに考えさせられるところがあるかと思いますが、また都合により当日参加できなかった方はどのような講演会・シンポジウムであったか、その概要を知ることができると思われるからである。

さて現代の社会現象の一つに観光をあげることが可能である。しかも近年の観光は、伝統的な民俗文化に関心が高まっているという。民俗は、人々の暮らしの一部であり長い間生活の中で積み上げ形成されてきた生活文化 (歴史) である。それだけに村人の暮らしぶり、想い、思考が汲み込んでいる。従って本来観光客に見せることを目的としているものではないが、地域社会の暮らし (歴史) を語る基盤的な要因となっていることからすると観光の対象になるところでもある。

男鹿市では観光振興の柱の一つにナマハゲ行事 (昭和五十三年、国の重要無形民俗文化財) を取り上げている。これにより男鹿市の観光振興をはかり、地域の

活性化そして経済効果を高めようとするねらいがある。人々の暮らしの変遷を語る民俗行事が、観光と結びつき、また観光は地域社会にどのような影響を与えることになるのか、ナマハゲの事例を通じて考えようというのが本民俗講演会・パネルディスカッションの目的である。当日は多数の方々のご参加を賜り、熱心な質疑応答もあり盛りあがった会であったように思われる。

このたび二名の本館研究所員からご投稿をいただいた。村中孝司氏は「江戸時代における外来植物の認識」というものであり、渡邊俊氏は「奥州合戦の戦後処理について」である。両氏とも新進気鋭の研究者である。そしてそれぞれ植物学、歴史学という専門分野からの執筆であるが、例えばここでは民間薬草の効能や地域の土豪の館と集落民の社会など民俗学との接点をもつところが多くある学問領域でもある。今後も関連する領域に視点をもっていただき寄稿下さることを期待するところである。

今後共よろしくご支援とご協力をお願い申し上げます
ところである。

(名誉館長 鎌田 幸男)

目次

観光と民俗を考える

鎌田 幸男

男鹿市の観光と観光行政について

菅原 正幸

真澄の見た男鹿半島とナマハゲ

—「男鹿五風」を題材として—

石郷岡千鶴子

男鹿のナマハゲ系儀礼における観光と民俗

—エコミュージアムの視座を通して— 平 辰彦

江戸時代における外来植物の認識

村中 孝司

奥州合戦の戦後処理について

渡邊 俊

活動報告

編集後記



男鹿半島（ナマハゲ—その面と習俗—（日本海域文化研究所））

観光と民俗を考える

はじめに

民俗は、民間伝承と同義に解され、民衆の風俗、習慣、暮らしぶり等の意味に用いられる。それは地域における生活様式を語るものであり、生活文化やそれを支える思考、更に人々の生活観と深く関わりをもっている。このように民俗は、地域に密着した生活文化であることが自明である。例えば男鹿に伝わるナマハゲ行事は、横暴で威圧的な言動ばかり目立つが、それには地域住民のお山の信仰（真山・本山）とそのお山から下りてくると信じられているナマハゲへの想いが刻み込まれているのである。そのため村人は、ナマハゲを丁寧に迎え入れてきたし、またその行事には、村人の生活観や人生観が反映されているといえよう。このように民俗は、地域住民の暮らしの積み重ねにより形成されたものであり、暮らしの中に生きている―村人の思いがしみ込んでいるものなのである。それだけに他へ見せるのが目的に継承されているものではなく、本質的に観光と異なるところでもある。

鎌田 幸男

ところで現代の社会は、観光が一つの社会現象となっていてから、これを避けて通ることはむしろ難しい状況になってきている。しかも観光客の見学希望に伝統的な民俗文化が選択されてきているという。こうして民俗は観光と関わりをもつことになる。

さて一方民俗は、現代社会の中で形骸化され変容してきてもいる。すでに消滅してしまった事象も少なくはない。男鹿市域に顕著なナマハゲもまた同様な変遷経過をたどっている。保存会を組織して活動しているところもあるが、衰退・休止をしている地区もある。しかし他方こうして衰退している行事を観光資源化と結びつけることで、自らの文化を再認識する契機にしようとする動きもある。地域振興策の一つのあらわれでもある。

男鹿市では、ナマハゲを観光資源化して年間を通じて体験できる「ナマハゲの里づくり事業」を展開している。ナマハゲは男鹿市の代名詞的存在であり、今や男鹿市の顔となっている。これを観光事業に生かそうとするものである。まさしく観光振興に民俗文化を取

りあげた事例である。「観光文化都市の形成」をめざした取り組みであるが、観光化されたナマハゲ行事が、今後どのような影響を受けるか、また地域住民はどのような認識をもち観光にどう対応するか課題でもある。

本講演とシンポジウムでは、観光の対象としての視点から地域の生活文化（ナマハゲ行事）を見つめるものである。そしてどうあるべきか、どのような関わりをもつものかを考えてみたい。

一、風土論の視点が必要

男鹿の地域にナマハゲ行事が生まれ、それが文化として継承されているが、その変遷過程を考える時、男鹿半島の風土論の視点が重要になってくる。

男鹿半島は、遠方から眺める（例えば南の西目地区の海岸あたり）と湾状のつけ根の箇所が見えず、また男鹿市域も見えず、ただ海上に突き出た（浮かぶように見える）二つの山（真山・本山が一つ、少し離れて低く小さく寒風山）となつて見える。北の八森海岸あたりから眺めてみても、山の位置は反対になっているが同様に見える。波間に浮かんで見える姿からは神秘観や異郷観が漂い、また地主神や寄り神が存在するような信仰の素地が感じられる。地図上からは想像もで

きない男鹿半島の姿がそこに見える。折口信夫がいうように海の彼方から神が出現して山へ登る⁽¹⁾とする考え方も、また柳田国男の浦人等が神仙の居を想像して登って拝せざるを得なかった動機である⁽²⁾とすることも、男鹿の風土が創り出したものである。吉田三郎は、白神山地に登って日本海を眺めたところ、男鹿の山が海に突出している、日本海を独占しているように見える⁽³⁾としている。菅江真澄は、西津軽郡の海岸の村を歩いて、的岩のこと、新山神の勧請、冬場にエサを求めて男鹿から海を渡って磯山（海榴山・椿崎）にきた鹿の伝説⁽⁴⁾などを記している。海に浮かぶ男鹿の山に関心を示していることが読みとれる。

男鹿半島は、海に突き出た砂嘴上の地形を呈している。それは地質上からすると八郎潟の形成と一体化したものと見えるが、丘状の自然的、地理的景観からの名称について柳田国男は、海から命名された⁽⁵⁾としている。

男鹿半島のやや西側に真山（五百六十七m）、本山（七百十六m）、少し離れて寒風山（三百五十五m）がある。そして、真山、本山は、通称「お山」とされ霊山として知られてきた。平安末期には堂宇が建立されて修験信仰の影響を受けることになる。また十二世紀末には「小鹿嶋大杜山」として史料上⁽⁶⁾に登場するが、いうまでもなく大杜山とはお山をさしたものであ

る。そして真山光飯寺遍照院や本山日積寺永禪院は、その信仰上の基盤となるものである。

こうした男鹿の風土の中でナマハゲとその行事が生まれ、その後修験信仰との関わりをもちながら特徴的な民俗行事として継承されてきたものといえる。

二、民俗としてのナマハゲ行事

もともとお山の信仰があつたところに平安末期には修験信仰が影響し、霊山信仰と深く関わることになる。村人にとってお山は、村の安全と暮らしを守護してくれる精神的な支えであつた。農民にとっては水田への水の供給源であり、漁師にとっては漁場を知る山立て（山割り）の目印であり、船材の確保の場でもあつた。新造船の進水式では、「お山参り」と称して新造船に乗って、村の前海からお山を拝んだものだという。また男鹿に生まれた者は、一生に一度は「お山掛け」をする習慣があつた。旧暦六月十五日（祭日に当る）がその日であり、住民のお山に鎮座する神々に対する信仰のあらわれでもある。村人にとってお山は、暮らしと密着していたことがわかる。こうした信仰の山からナマハゲが下りてくるのである。

折口信夫が指摘したように、年の変わり目に遠方からマレビト（客人神）が現われ⁽⁷⁾、悪霊や災厄を祓い、

福をもたらすといういわゆる福神が来訪するというものである。ナマハゲもまたマレビトと考えられるのである。

迎える各家々では、ナマハゲの来訪をねぎらい、お膳を供して饗応と歓待をするのである。そしてナマハゲの横暴で威圧的な言動に対しては、常に低姿勢で丁寧な言葉で応待するのも、来訪神への感謝の気持の表れである。帰る時には献餅（ナマハゲ餅、切り餅）をして、来年の来訪を約束している。こうして新しい年を迎えることになるが、ナマハゲ行事には人の暮らし・心情・生活観が浸み込んでいる。「ナマハゲが来ないと正月（新年）を迎えた気分になれない」というのも、こうした村人の心情を語るものであり、ナマハゲ行事を支え継承してきたというなまはげへの想い、人生観さらには価値観が語られているのである。しかもナマハゲ行事の根底には、村人の暮らしと結びついているお山の信仰がある。柳田国男は、ナマハゲの模倣はできても、それはナマハゲを理解したことにはならない。衰退したので復活をしようとしても容易なことではないと警鐘をしたのもそのことである。⁽⁸⁾

ナマハゲは、男鹿地域の暮らし、生活文化を知る上で貴重な行事であり、昭和五十三年に国指定、重要無形民俗文化財になっている。

こうした民俗行事としてのナマハゲは、観光振興策

（資源化・素材）の一翼を担うことになるのである。

三、観光の視点から

観光は、現代の社会現象の一つといえる。観光には、例えば旅行、観光地、お土産、宿泊地、交通機関、保険、旅費、国内、国外、国体、個人、家族、有志、グループなど多数のキーワードが考えられるが、観光を辞書的に説明すると文物や自然、風光明媚などところを見てまわることと解される。そして近年は、生活文化としての伝統的な民俗行事を見学希望する観光客が増えているという。ナマハゲ行事もまたそうした素材の一つなのである。

ここでは民俗行事のナマハゲは、観光資源としてどのような関わりができるかを視点にして考えることとする。

真山のナマハゲ伝承館では、「見る・知る・体感する」という観点から、真山地区に伝統的に継承されているナマハゲを再現している。観光客のために行っているナマハゲ行事の再現である。習俗としてのナマハゲ行事と観光を目的としたそれとの相違は、単的には行事の時期すなわち厳肅な年越の晩に各家々をまわるものと、観光客を対象にして演じられるもので常時見学が可能なものとの違いである。しかし本質的には前

者はすでに触れたように村人のお山の信仰と深く結びついているところに特徴があり、また村人のナマハゲへの想い（生活観、人生観）が浸み込んでいる。後者は村に伝わるナマハゲ行事を忠実に再現しているが、対象は観光客であり年越の晩の模倣文化になってしまふ。しかしながら移築した茅葺きの民家であること、神仏の祀られた囲炉裏のある居間がその再現の場となっていること、昭和三十年代の頃までの農家の様子、間取り、そしてナマハゲの横暴で威圧的な態度や問答の様子、それに応待の仕方など細かな面の観察が可能である。このように真山地区に伝わる古いナマハゲの行事が体験できるところに意義がある。

今後検討課題があるとすれば、観光客の目的とも関連するが、例えばナマハゲ行事の解説をもう少し詳しくするとか、仮面・持物・ケデ（装束）などを異にする地区のものを取り上げるとか、最も厳めしい様相をしている地区のナマハゲを考えるなど様々な方法はある。また他地区のものと比較することにより、地区ごとの行事の違いが明確になる。それはナマハゲをより深く知ることにも通じるものである。

観光客は、こうしたナマハゲの再現を見て楽しかったという。ナマハゲの雄叫びと威圧的で横暴な言動に驚きと一瞬の恐さを感じるが、迎える側の主人との問答（観光客を意識した問答）を聞いて笑いが出たりす

る。それが印象に残るのであろう。一般的な観光からするとナマハゲ行事の概観を知ること、そして見る楽しさ、行事の中身を体感することで良いのかもしれない。

ところで近年は本物のナマハゲ行事（年越の晩、各家々を来訪する）の体験を希望するものが多くなっている。しかし気をつけなければならない問題がある。民俗事象は、ある特定の一地区（集落）だけのものもあるし、その市域全地区で実施するものもある。例えば福米沢の送り盆行事のようにその地区だけのものもあるし、ナマハゲ行事のように男鹿市の全村で行われているものもある。しかも村ごとに例えば仮面、持物、装束、仕ぐさなどに微妙な違いがある。

これを観光という面からみると、一村と全村では、その対応が全く異なることになる。特にナマハゲ行事のように複数村に見られる場合、各村の住民意識や社会的な関係（結びつき）、それに全村の社会的、組織的な体制づくりにも考慮されなければならない。男鹿市は「ナマハゲの里づくり」を掲げているが、受け入れ側の住民の意識が重要になってくる。

地域住民の中には、民俗行事が観光化され、また商品化されることに抵抗をもつ考え方もあるが、逆に観光資源化されたことで自らの民俗文化を再認識し、地域興しに役立てようとする積極的な動きもある。

① ナマハゲ踊り⁽⁹⁾

この踊りのおこりは、男鹿温泉郷（北浦・湯元）に宿泊したお客さんを歓迎するという考え方で、ホテルの従業員がナマハゲに扮してサービスしたのがはじまりという。すなわち飲食の場に突然ナマハゲが現れてお客さんを驚かせるが、横暴で威圧的な模倣行動と言動ばかりが目立ち、ただ暴れるだけのナマハゲという批判があった。ナマハゲ行事の部分的な再現というが、模倣ナマハゲ、模倣行事は誤解される原因にもなる。こうした事を背景にして昭和三十六年、ナマハゲ踊りが創作されたのである。ナマハゲという冠りはあるが、ナマハゲ行事とは本質的に異なるものである。しかしその根底には、ナマハゲ行事を衰退させず、保存と継承に結びつけようとする意図も働いていたのである。現在は真山神社の境内で行なわれるナマハゲ観光柴燈祭りでは披露されている。この踊りは祭りを一層盛り上げ、観光客の楽しみの一つにもなっている。

② ナマハゲ観光柴燈祭り⁽¹⁰⁾

ナマハゲとあるが、実際は観光をメインとした柴燈祭りである。民俗としてのナマハゲ行事や神事としての柴燈祭りとは基本的に異なるものである。

柴燈祭事は、江戸時代から真山・本山の柴燈堂で毎年正月一―三日にかけて行なわれてきた。神仏に燈明

して柴木を焚き、一切の煩惱を焼失し無病息災、国家隆運の祈禱をする一種の火祭り神事である。修験道では、これを柴燈護摩と称して代表的な火祭り神事とされている。そして三日夜、亥の刻、柴燈堂では油餅の神事が行なわれてきた。直径三尺の鏡餅をこの火に燻らせ、中央に窪みをつけてそこに油紙を敷き油を注ぎ、紙よりに火をつけて燃やすのである。これが油餅である。柴燈堂の窓を素早く開けて油餅を外へ投げ出すと、どこからともなく三鬼神が飛び来てそれを奪い取り、再び山奥へと姿を消すという。この一連の行事が油餅神事と称されるものである。

明治になると本山のそれは廃絶したが、真山では変遷をくり返しつつ現在も三日、柴燈祭を継承している。これを観光化を目的として祭り化したものが、ナマハゲ観光柴燈祭りなのである。

また黒こげになった油餅は、小さな切り餅にして観光客に一個ずつ配られる。神事の餅であり健康になる・病気をしない・災難除けになるなど御利益があると思えられている。

③ナマハゲ太鼓

舞樂堂では、昭和五十年に創作されたナマハゲ太鼓が打ち鳴らされている。現在は仲間も増え演目も充実し一種の芸能として活躍している。観光を目的に創作

されたもので、ナマハゲ行事と直接関わるものではないが、それを広く知らしめる役割を果たしている。ナマハゲ太鼓もナマハゲ踊りと同様に民俗行事のナマハゲという名前に関わりをもちながら、新しいナマハゲの民俗芸能に邁進しているといえよう。

④ナマハゲ口説⁽¹⁾

男鹿市教育委員会が、ナマハゲ民謡として創作（平成三年）したものにナマハゲ口説^{くどき}がある。その主眼とするところは、ナマハゲには暴れる、厳めしいなどの怖いイメージがあるが、「怒ることは愛情の表現」という考え方で慈しみをもった人間味のあるナマハゲ（鬼）へ変身させている内容である。

これはナマハゲ踊り、ナマハゲ太鼓、ナマハゲ観光柴燈祭りに続くものであるが、その意図するところは男鹿の観光化を意識すると同時に、すでに創作されているものに加えて「郷土愛を培う心を助長してナマハゲ行事の保存継承に結びつけよう」というものである。録音したテープを学校や公民館、文化団体へ配布しているが、具体的に普及と活用をどのように図るか課題もある。またここに収録されている内容を理解するには、伝統的な民俗行事としてのナマハゲの目的や意義、ナマハゲ行事の本質をきちんと把握していることが要件のように思われる。それを基盤としてはじめ

て人間味のあるナマハゲ、愛情のあるナマハゲ、郷土愛に結びつくナマハゲの理解が得られるものと思うのである。

こうして観光をメーンとして創作された様々なものは、それ自体が芸術化し観光化に向けて誘客することになるのである。同時に民俗行事としてのナマハゲの知名度も高まり、観光客が集まることを願うものである。

⑤ナマハゲ伝道士認定試験⁽¹²⁾

社会の変革と共に生活が合理化、近代化され村の暮らしも変わった。様々な行事に対する村人の意識も変容してきている。行事が簡略化されてきたのもそのあらわれの一つでもある。伝統的に継承されてきたナマハゲ行事も例外ではない。村内在住の若者不足から休止している村もある。

こうした事情からナマハゲを正しく理解（認識）すること、また保存と活用そして継承の意識を高揚し、習俗としてのナマハゲ行事の普及、サポーター的役割りができること、更に男鹿の観光振興に結びつくこと等を目標に掲げて、ナマハゲ伝道士認定試験を実施してきた。本年（二〇〇七年十一月）で五回を終了した。

受験者は東京都とその周辺地域が最も多いが、北海道から福岡県、徳島県など全国各地からこれまでに四六

二人がいる。換言すると全国各地にナマハゲ伝道士が誕生したことになる。志望動機は様々だが、第四回のそれをみると「ナマハゲ行事の知識を深めたい（四十四名）」「習俗・文化に関心がある（三十八・九％）」そして「ナマハゲ行事の魅力（六・七％）」などとなっている。ただし地元からの志願者が二百四人（四十四・二％）と半分に満たないことである。その理由は様々あると思うが、要するにナマハゲは知っているということであろう。男鹿市に在住する者が、講習を受けて直接試験を受けたところ、記述の部分はほとんど書けていなかった。ナマハゲの雄叫びや行動、それに問答の一部分は知っているかも知れないが、ナマハゲの語源やナマハゲの本質に関わることは書けなかったということである。ナマハゲの外観的な様相は知っているが、本質的なところになるとわからないのである。その意味でも地域住民が、自らの生活文化を再認識する必要がある。それは観光の上でも重要なことである。自文化をきちんと理解していなければ、それを正しく伝達することはできないことである。

またナマハゲ伝道士の中には、教員や大学生などかなりいる。民俗学を専攻している学生であったり、教員は民俗文化への関心、研究の他に児童、生徒への学習の素材のための参加であるということもある。今後こうしたナマハゲ伝道士を核としたナマハゲ学会

(仮設)を組織してはどうだろうか。毎年一回、男鹿市を会場に様々な角度から情報交換を図り、また各自のナマハゲ観、研究成果等を自由に発表する場があると、ナマハゲ理解が一層深まるばかりではなく、全国にその情報発信基地として、またナマハゲ行事のPR活動にも役立つものと考ええる。それは観光振興にも結びつくものといえよう。

四、観光と民俗の関わり

観光は本質的に民俗と異質なものであるが、現代の社会現象からするとそれを避けて通ることができない大きなうねりをなしている。むしろ積極的に受け入れて活性化に結びつけようとする動きが見られる。それでは観光を視点にして民俗をどのように考えたらよいのであろうか。

まず村の生活文化が、観光資源化されることにより、どのような影響を受けることになるか、また観光は、観光客と受け入れ側が主要となるが、例えばナマハゲ行事のように男鹿市の各村ごとに行なわれているような場合、各村は観光とどう対応するか、また協力の可能な村とそうでない村、そこに暮らす村人はどのような意識で観光に対応するか、更には宿泊地はどうか、そして経済事象が絡むなど課題も多い。こうした

中で男鹿市は「ナマハゲの里づくり」を掲げ、ナマハゲを骨子に観光と結びつけている。そしてそれにより自らの文化を再認識する契機となり、また行事への取り組みが積極的となり活発化へつながり、それは地域振興にも役立つことになるというものである。

民俗には暮らしぶり、生活様式を通じて変容する要因が含まれている。社会の変化と共に村内又は地域社会の人々の結びつきや社会関係も変化している。観光化の影響でそれが加速されることもある。ナマハゲ行事も伝統的な行事として継承されているが、様々に変遷していることは明確である。

一方ナマハゲ踊り、ナマハゲ太鼓は、観光化を意識して創作されたものである。本来ナマハゲ行事とは直接関係はないものであるが、現在是一種の芸能として知られてきている。ナマハゲ口説もナマハゲ行事の普及版的な考え方で創作されたものである。観光という新しい波が押し寄せることによりナマハゲの知名度が高まり、古い習俗としてのナマハゲ行事への影響が及んでいることは確かである。

民俗として継承されてきたナマハゲ行事は、衰退したり、休止しているところもあるが、観光化により、再興することも可能であろう。地域社会の取り組み、住民の民俗と観光への再認識、そして行政の関わりなどが「ナマハゲの里づくり事業」をめざす上で重要な

鍵になると思われる。

五、ナマハゲ行事の保存と活用のために

①ナマハゲ行事の再認識の観点から

先に触れたが、お山は霊山としてまた村の安全と暮らしを守護してくれるところとして村人の信仰を篤くしてきた。ナマハゲは、お山の信仰—のちには修験信仰の影響を受ける—と深く関わりをもっている。ナマハゲ行事の根底には、お山の信仰があるとされる所故でもある。現代社会になってお山の信仰は薄れているが、村人は暮らしにおいて「お山がどのような存在であったか」再認識されなければならない。それがナマハゲ理解につながることになるのである。

次にナマハゲに扮する若者と迎える側の各家々の関係を知ることである。ナマハゲ行事といえば、ただちにナマハゲ自体に焦点が注がれナマハゲの動きばかりを追いかけてしまう傾向にあるが、それを継承してきた迎える側の思考意識、態度に着目しなければならぬ。迎える側の主人は、正装して、常に丁寧な態度を示し、来訪のご苦勞をねぎらい、歓待と饗応をし、また献餅して来年の来訪を約束してきたのである。このように迎える側の姿勢が、この行事を支えてきたといえよう。ナマハゲを理解するには、こうした迎える

側のナマハゲへの想いを認識しなければならないのである。出産や死のケガレ、また病氣など特別な事情のある家を除いて、全戸が来訪の対象であり、また歓迎してきたのである。ナマハゲに村人の生活観や人生観が込み込んでいるとされる理由でもある。それだけナマハゲは、地域に根づいた民俗なのである。

②保存と活用を考える

伝承文化には暮らしの歴史（生活観）がある。後世に継承する責任があるといわれるのもそのためである。

さて保存と活用のためには、伝承母体のような中心的役割をもつものが必要になってくる。当番制、有志、保存会、PTA、青年会、講中など様々考えられる。その母体を村の自治と運営の中に組織づけをして機能させることである。そして古い頃のように全戸が総参加をすることである。そこに村人の連帯感が生まれ、また自らの行動としての意識づけとなり、更に暮らしの文化への対応や活発化に通じるなど、やがて村づくりや地域振興に結びつく行事へと進展すると思われる。

例えば昭和三十年代の村規約では、ほとんどの村社の祭典を村の運営の柱の一つに位置づけている。そして輪番制や当番制をもって運営している。全戸参加で

あり、理由なく神社へ参詣しないと罰則があった。ナマハゲ行事も運営の基本的なところはそうした考え方をもって継承してはどうかということである。また同じような地区は、互に情報交換をして協力しあうことも必要であろう。人手不足から中止を余ぎなくされた地区などは、再興をはかる上で何らかの協力体制が必要であると思われる。また小学校や中学校の郷土学習や総合学習との連携も考えられる。そこからナマハゲは、自分たちの村の民俗文化であることの意識と自覚が生まれてこよう。また保存と活用の芽を養うことになるのである。

真山の伝承館でのナマハゲ行事再現がもつ意義は大きい。古いスタイルのナマハゲの様相は、タイムスリップした感を呈している。欲をいえば真山地区のナマハゲ行事ばかりでなく、他地区の事例も再現して比較できると一層真山地区のそれが明確になろう。このことは民俗文化の意識の高揚とその活性化を図る上でも意義がある。方法は諸々あるが、こうした試みは観光施設から文化施設への広がりをもつものでもある。このように考えると伝承文化の保存と活用は、教育、継承、宣伝、観光、そして里づくりの上でも重要な視点であるといえよう。

おわりに

男鹿の観光振興を伝統的なナマハゲ行事を通じて考察した。それは、男鹿の風土にマッチした民俗文化であるが、男鹿市では全国的に知名度の高いナマハゲの名称を冠して「ナマハゲの里づくり事業」に着手している。

男鹿半島には二つのナマハゲ文化の拠点がある。真山つまり真山や北浦などの北磯地区、本山つまり門前などの南磯地区である。前者は真山すなわち赤神山光飯寺遍照院が信仰の拠点として位置している。そしてナマハゲ観光柴燈祭りの舞台となる真山神社とその奥宮、男鹿市域のナマハゲを展示しているナマハゲ館、ナマハゲ行事を再現している真山伝承館がある。また神社境内の散策、万体仏堂などの見学も可能である。後者は本山すなわち赤神山日積寺永禪院が信仰の拠点として位置していた。そして九百九十九の石段伝説をもつ五社堂（国指定）の参詣、長楽寺宝物の見学などが可能である。

この両者を結びつけるのは「お山掛け」である。男鹿に生まれ育った者は「一生に一度はお山掛けをする習慣」があった。北浦―真山神社―奥宮―真山・本山―五社堂―長楽寺―門前までのコースである。お山は修験の霊場でもあり、様々な建物跡を尋ねまた諸神々

に参詣をしながらのお山掛け体験である。こうした男鹿の風土の中でナマハゲ行事が育くまれてきたのである。年越の晩の伝統的な民俗としてナマハゲ行事の見学希望が増えてきているという。そのためには各地区で協力する家を募り、受け入れ体制を整えることである。また少なくとも同地区二―三軒を見学、更に他地区にも目を向けると比較研究の上で役立つと思われる。

ところでナマハゲは、ケデをまとい仮面をつけ、刃物や手桶をもち各家々を来訪する。その形相や横暴で威圧的な態度は古いナマハゲの様相と変わらないが、しかし威厳のあるナマハゲとその恐さを感じられない。昭和三十年代の頃までは恐さが先に立ち子供や娘、嫁、そして、婿までもが隠れたものだという。特に子供は息を殺して隠れながらナマハゲと家人（親）との問答（親が子供をかばう言葉）を聞いて、親への信頼を強くしたものだともいう。現在は、子供たちが親の傍でナマハゲと直に接し教訓を受けている。子供への戒めも変ってきていることがわかる。従って年越の晩のナマハゲ行事というが、古い頃のナマハゲと現代版ナマハゲの違い、同時に迎える側の意識も変容してきていることに気をつけなければならない。

またナマハゲ行事の概要を知ることが目的の場合、まずナマハゲ館の見学をすすめたい。ここでは男鹿市

域の各村のナマハゲが勢揃いしている。仮面、装束、持物などに特徴がある。ナマハゲは各村によって様相に違いがあることがわかる。次に真山伝承館での体験をしてはどうか。ここでは古い習俗を継承、再現しているのが真山地区のナマハゲを実感できる。他村のナマハゲの協力があると、比較が可能でナマハゲ理解が一層深まるように思われる。

また幸いなことに男鹿は温泉地である。全国に多数のナマハゲ伝導士たちもいる。こうした人たちと地域が一体化して「ナマハゲ学会（仮設）」を作るなどして毎年男鹿の温泉郷を会場に、研究発表したり、見学会をもったり、語りあうなどの情報交換会をもってはどうだろうか。ナマハゲは男鹿の顔である。観光振興策の一つの骨子に位置づけられていることから、地域住民、行政が一体となった協力体制が必要である。それはまた経済効果の高まりにも通じるものといえよう。

本稿はナマハゲの視点からとなっているが、男鹿半島は風土面からも観光に適している。真山・本山のほかにもう一つの山、寒風山がある。頂上からは四方面が見渡せる景観をもつところである。西海岸の河岸断層、脇本城跡（国指定）、また目潟火山群（一の目潟）の天然記念物指定など資源の豊富などところである。こうした面からのアプローチも必要なことである。

註

- (1) 「まれびと」(「春来る鬼」P一二五～一二八所収、「折口信夫全集」⁽¹⁵⁾ 中央公論社 昭和三十年一月)
- (2) 「風景の大小」(「をがさべり」P一二六～一二七所収、「定本柳田国男集」⁽²⁾ 筑摩書房 昭和五十三年十一月)
- (3) 「赤神と黒神の喧嘩」(「男鹿のこぼれたね」P七十五～八十二、吉田三郎 秋田文化出版社 昭和五十二年一月)
- (4) 「外が浜風」P一五三～一五四、「外浜奇勝」⁽²⁾ P二一四～二二六(『菅江真澄遊覧記』(1)(3)所収、東洋文庫(内田武士・宮本常二)平成四年五月、十二月)
- (5) 「半島の一世紀」(「をがさべり」P一一九～一二〇 注⁽²⁾に同じ)
- (6) 「吾妻鏡」第二(吉川弘文館、昭和五十二年、P三六七「羽陰温故誌」⁽⁷⁾)(『第三期新秋田叢書』⁽²⁾ 所収、歴史図書社、昭和五十一年) P二六六
- (7) (注一)に同じ、他に「なもみたくり」「けた」「遠来の神」「神のおとづれ」(P一二八～一三九) がある。
- (8) 「正月様の訪問」(P一二三～一二五)、注⁽²⁾に同じ
- (9) 「現代のナマハゲ柴燈祭り」(拙稿「ナマハゲ 柴燈祭りとナマハゲ」所収、『ノースアジア大学国際観光研究(創刊号)』P三十七～三十八、平成十九年九月)
- (10) 「ナマハゲ柴燈祭りとナマハゲ」(注九に同じ P三十一～四十二)
- (11) 「ナマハゲ口説のこと」(拙稿「民俗と観光」所収『雪国民俗』⁽³²⁾ P六～十、平成十九年三月)
- (12) 「ナマハゲ伝導士認定試験のこと」(P二～四、注⁽¹¹⁾に同じ)

男鹿市の観光と観光行政について

菅 原 正 幸

はじめに―現状と課題

本市は、海と山、湖そして温泉等自然景観に恵まれていることから、昭和四十八年、国定公園の指定を受けております。男鹿半島は、三方が海に囲まれており、海岸など自然景観はもとより、文化財やなまはげなど観光資源が多くあり、秋田県における中核的観光地としてだけでなく、東北地域においても主要な観光地となっております。

本市の観光客数は、平成十六年の男鹿水族館のリニューアルオープンにともない一時的に増加したものの、その後減少傾向にあり、また、平成十七年の宿泊率は九・三％と低く、通過型の観光地となっているほか、冬期間の観光客においても厳しい状況にあります。

このことから、観光イベントの充実、温泉郷の整備、二次アクセスの整備、体験型観光や教育旅行の誘致などに、滞在型観光を促進して宿泊観光客の増加に努める必要があります。また、国際観光を視野に入れ

た案内標識の設置、地場産品を利用した食の提供、ホスピタリティの向上などにより、受入れ体制の強化を図るとともに、周辺地域との観光ネットワークの形成や冬期間でなければ味わえない観光資源の掘り起こしを進めるとともに、誘客宣伝活動を一層強化し、さらなる誘客を図る必要があります。

さらに、観光地としての特色を出すため農林水産業などの関連産業と連携し、地域資源と結びついた観光を推進し、地域経済の発展を促す必要があります。

男鹿市の観光客数の推移

(単位：千人)

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006
宿 泊	283	267	279	259	225	221
日帰り	2,118	1,968	1,921	2,430	2,191	2,113

資料：男鹿市

誘客のための施策

① 観光拠点の整備

- ・ 男鹿温泉郷環境整備事業
- ・ 観光拠点環境整備事業
- ・ なまはげの里づくり事業
- ・ 観光案内機能施設整備事業

② 観光宣伝・受入れ体制の強化

- ・ 観光宣伝活動の推進
- ・ 国際観光振興の推進
- ・ 広域観光ネットワークの強化と観光ルートの作成
- ・ 食とホスピタリティの向上対策

③ 観光関連産業の振興

- ・ 観光関連産業との連携強化
- ・ 体験型観光、教育旅行の誘致

④ 各種イベント（平成十九年度）

- ・ 鯛まつり五／十五～六／三十
- ・ 宮沢海岸 夕陽フェスティバル七／二十八
- ・ 寒風山まつり九／二十三・二十四
- ・ 秋田船方節全国大会十一／十七・十八
- ・ なまはげ柴灯まつり二／八～十
- ・ お山掛け（六月末～七月初）
- ・ 西海岸遊覧事業（平成二十年）

⑤ 文化財の宣伝活動の推進―特に国指定物件

- ・ 男鹿のナマハゲ
- ・ 脇本城跡
- ・ 男鹿目潟火山群一ノ目潟
- ・ ツバキ自生北限地帯
- ・ 男鹿のまるきぶね
- ・ 赤神社五社堂（五棟）
- ・ 同神社赤神権現堂内厨子一基
- ・ 東湖八坂神社祭のトウニン（統人）行事

おわりに

以上男鹿市の観光に関する現状と課題を中心に述べたが、次のような国指定の文化財があり今以上に関心を高める必要がある。

建造物では、赤神社五社堂（五棟）が平成二年に国指定となっている。九百九十九段の石段伝説をもつことで知られるが、ナマハゲとも深い関わりがある。同神社赤神権現堂内厨子一基（昭和四十二年国指定）もある。

重要無形民俗文化財として「男鹿のナマハゲ」（昭和五十三年国指定）がある。男鹿市では、このナマハゲを核としてナマハゲの里づくり事業を展開している。また重要有形民俗文化財として「男鹿のまるきぶ

ね一隻」(昭和二十年国指定)がある。男鹿の沿岸漁業史には欠くことのできない舟である。

史跡として脇本城跡(平成十六年国指定)がある。

男鹿半島の南側、脇本地区に位置する中世の城跡であり、十五世紀には城として機能していたと想定される。

天然記念物としては、「男鹿目潟火山群一ノ目潟」(平成十九年国指定)がある。火山形態の一つであるマール(爆裂火口)の典型として知られ、二ノ目潟、三ノ目潟と共に火山群を構成している。このうち一ノ目潟は、湖底堆積物(年稿)など新しい発見があり、世界的に注目されている。同じく天然記念物としてツバキ自生北限地帯(大正十一年国指定)がある。

重要無形民俗文化財に「東湖八坂神社祭のトウニン(統人)行事」(昭和六十一年国指定)がある。この行事は天王地区(潟上市)と船越地区(男鹿市)が担当する行事である。

このように多くの国指定の文化財を保有しており、しかも背後に温泉地をもつ男鹿市である。地域住民と行政が相互に協力をして観光事業に取り組むことが期待される。

尚パネルディスカッションに用いた資料「男鹿市観光の紹介と課題」(男鹿市産業建設部観光課)は、『ノースアジア大学国際観光研究』(二〇〇七年)に掲載し

ている。本稿は「誘客のための施策」に部分加筆をしたものである。

真澄の見た男鹿半島とナマハゲ

—「男鹿五風」を題材として—

石郷岡 千鶴子

『菅江真澄遊覧記』中「男鹿の秋風」「男鹿の春風」

「男鹿の鈴風」「男鹿の島風」「男鹿の寒風」を併せて「男鹿五風」というのは昨今のことであるが、この五篇には重複した部分があり、真澄自身も以前に記したとして、詳述を避けている記述がある。

しかし、それぞれの「風」には季節や歩いた地域の風俗、天変地異など、その時々々の真澄の観察力が窺えて男鹿各地の名勝・景観・言語や行事についての貴重な記録ともなっている。「秋風」については旧天王町と船越での「祇園社祭礼（東湖八坂神社例祭）」の記述が大半を占め、男鹿半島そのものに関する記述が比較的少ないが、八郎潟や八竜大権現、八岐大蛇とのかわりで祇園社祭礼^①を記録している。

また、「島風」「寒風」ではナマハゲ行事の記録を残し、以来多くのナマハゲ研究の基礎的な資料として、古態を伝える貴重な文献となっている。

一 「五風」における真澄の足跡

（地名表記は『遊覧記』による）

真澄は文化元年（一八〇四）に男鹿を訪れた際に「男鹿の秋風」を記し、再度の訪問である文化七年（一八一〇）には「男鹿の春風」「男鹿の鈴風」「男鹿の島風」「男鹿の寒風」を残している。以下にそれぞれの「風」における旅程の概要を示す。

「秋風」では久保田を出発し土崎・王村・飯村・大倉・田屋野沢・岩倉・祖神平・雄猪鼻山・脇本・船越と進み、天王村に戻っている。翌日は天王村から船越・脇本・生鼻崎・天満宮・比詰・金川・羽立・船川・平沢・増川・女川・椿・中山・双六の浦・小浜・門前・小浜を周遊し、脇本へ戻ってから岩清水・大保田・飯森を巡ってから船越・天王の浦へと帰っている。再度の訪問となる文化七年の「春風」では申川の浦より出発し橋本・谷地中・琴川・谷中・安田・相川・真山葉

師の峯・真山・矢次・水口・蟻塚ながね・戸賀の浦・北の浦・鳩崎・染川（相川）の浦・鹿子田・野村・湯本・湯の尻と巡り、「鈴風」へと繋げている。

「鈴風」では湯の尻・中里の浜・黒崎・平沢・北平沢・小浜・塔沢・畠崎（入道崎）・水島・畠崎・みやさか・戸賀の浦・浜塩屋・浜中・塩戸の浦、「島風」では塩戸の浦・えびし島・加茂の浦・青砂・大産橋・小産橋・門前・本山日積寺永禪院・門前の浦、「寒風」では門前・椿・増川・雄猪鼻の崎・田谷沢・鮎川・真山・湯本・野村・相川・脇本・島田・滝川・安善寺・三森・渋川・滝の頭・谷地中・中石を巡り宮沢に戻っている。

このように「秋風」において真澄は文化元年八月二十一日に寒風山に登ろうと天王を出て、夜更けに八郎潟を舟で渡り天王に戻っている。二十三日に再び潟を渡って男鹿の浦を見てまわろうとし、三十日には船越を出立している。その後、文化七年再度男鹿を訪れたのは三月二十七日。「寒風」における十月二十八日中石という集落の近くに岡獅子という小山があつて、人々が地震を恐れて小山に逃げ、仮小屋を作ったという見聞を最後にしている。その後、宮沢（南秋田郡琴浜村）の漁師の家で冬を過ごし、文化八年の正月を迎えたとある。「秋風」ではわずか十日ばかりの滞在であるが、二回目の訪問では約半年を男鹿で過ごし、各

地で見聞を深めた真澄は「春風」「鈴風」「島風」「寒風」に分割して記録している。

二 特徴的な行事や習俗について

○毎年十月のころ、沖で雷が鳴ると、これを魚集（いおつめ）と称し、きょうから漁待（とりまつ）といって、はたはた（鰯）が寄ってくるのを待ちかまえて網引きが行なわれる。そのころは荒波の磯辺にたくさん（の魚舎（なや））がたちならび、その漁の海士たちの長を村君とよぶ。これはたいそう古くからの習俗で、松前の鮭のあびき（網漁）や、津軽のたらのひれくう海士たちの間でも行なわれている（中略）。毎年その季節になると、雷が空であれくるう。雷鳴を世間ではたがみというのは、鰯神という意であるう。この魚のはらんでいる卵をしばらく出したものを雷子（ぶりこ）という。そのぶりこに、牡鰯の白子というものをしほってかけ、海水にひたしておくと玉のようにかたまってしまう。これを二十ほど、縄につらねて数珠のようにしたものをつなぎぶりこという。また磯べの岩間、あるいは藻くずのなかについている卵をかきあげて拾い、同じようにつなぎぶりことしている。（「男鹿の秋風」⁽²⁾）

・今日の鰯漁でも「雷が鳴ると鰯が寄って来る」と

いうが、雷をタカカミ（真澄はたかかみと記した）
 というのは、万葉集に見られるオカミという龍神の
 名に依ったもので、オカミ・オカミツハ・タカオカ
 ミ等の名がタカカミとして残ったものであろう。雷
 神を龍神と同一視して魚類の神とした思考が背景に
 あって、鰯の卵も雷子として記述が残り、これをブ
 リコというのは鰯の子だと言ひ訳したという言い伝
 えがあるが、これははつきりしない。

○尾名川（女川）の部落にきた。堂があり、円仁（慈
 覚大師）が作られたという十王の像（十王経による地
 獄にいる十人の王）がおいてあった。台島の浦の眺望
 はおもしろかった。ここの王余魚（かれい）の形をし
 た岩があった。この浦でも、水江の浦島の昔語りを、
 木曾路の寝覚めの床、あるいは津軽の小浦・大浦（中
 略）と同じように、海士たちがもっぱら伝えている。

〔男鹿の秋風〕⁽³⁾

・鎌倉以降の浄土信仰に基づき、地獄極楽の観念が
 流行して十王への信仰も定着したことから、各地に
 十王堂が安置されるようになった。閻魔大王を中心
 とするため、焰魔堂の名で呼ばれることも多い。天
 台宗が十王信仰を伴って男鹿に上陸した様相が窺わ
 れる。また、浦島説話は竜宮に象徴される海中他界
 観を示すもので、海浜の集落には地形の影響もあつ
 て、多く伝播している。

○このあたり（真山）は疱瘡（もがさ）がはやってい
 る最中なので門戸に柵（ゆだめ、弓をためて正しくす
 る道具）をたて、わらふだ（さんだわら）を笠にし、
 わらじを重ねて結い、それにとうがらしをふたつはさ
 んでいる。これはこのような色のよい疱瘡を願つての
 ことであるという。疱瘡の神には、日に三たび食物を
 奉り、また茨二本に露のとうもさしあげる。〔男鹿の
 春風〕⁽⁴⁾

・天然痘（疱瘡）の古名をもがさといひ、面瘡（お
 もがさ）の略と言われる。疱瘡の跡のあばたをいも
 と言うことから、疱瘡そのものをいもがさとも言
 う。このことから疱瘡神をいも神というようになつ
 たが、疱瘡の神であるいも神はこの神に祈れば疱瘡
 にかからなかったり、軽く済んだりすると信じられ
 た神、あるいは疱瘡をうつしてまわると信じられた
 神であった。疱瘡除けのまじないとしては疱瘡絵が
 ある。これは紅で鍾馗や桃太郎、鎮西八郎為朝等を
 描いた赤刷りの錦絵で、疱瘡神が赤色を好むという
 信仰に因む。唐辛子を供えるのはこの疱瘡神が赤色
 を好む信仰に依る。

○五月の上旬のころ、湯本から湯の尻の浦に来て一泊
 した。湯の山のこちらは鹿がたいそう多いので、田ご
 とにやきしめをさしており、・・〔男鹿の春風〕⁽⁵⁾
 ・やきしめとは小魚を焼いて串に刺したもので、こ

れを鹿の来ぬまじないとする。やしめと同様の習俗としては二月八日のコト八日、あるいは節分の日の鰯に柁を門口に刺すことがある。これは病や災厄の神が家中に入らぬことを願ったもので、「鰯の頭も信心から」という諺の語源となっている。鰯の頭を黒焼きにしてその悪臭で厄神を寄りつかせないようにする、柁の棘で災厄の神を追い払うという厄除けのまじないである。鹿の食害を防ぐために、家毎に消極的な形での追い払いを考えていたのだと思われる。厄神への防御が動物の食害へ及んだ例で、同様のものに猪除けがある。

○「黒崎の白蕨」といって、かわったわらびが生えている。その由来は、むかし、ある法師に宿をかけた女が、海が荒れてわかめをとることができない。何を汁の実にして旅の僧をもてなそうかと思索していると、僧は「いまたどってきた山路にたいそう蕨が多かった。それを採ってきたら」という。女は笑って「灰蕨（あくわらび）をしなければ苦くてすぐに食べられるものではない」と答えた。「いや、その必要はない」といって、僧は山に出かけて行き、ひとつかみほど採ってきて「この蕨はけっして灰をささずに煮ろ」といったので、そのまま鍋に入れて火にかけた。やがて食膳にだしたところ、味もたいそうよかったという。これは空海（弘法大師）がこの世に現れて教えられたので

あろうと、人々はおつばら語っている。（「男鹿の鈴風」⁽⁶⁾）

・弘法大師の奇跡に関わる伝承の一つがこの「あく無し蕨」である。この説話の場合、大師に親切にした家には幸福がもたらされ、不親切にした家には報いがあるというパターンがあるが、真澄の記述には片方のみであって、大師の奇瑞説話が簡略に変化してもたらされてものと考えられる。海浜部らしい表現は後世の附会であろう。

○家の老女は部屋の際に青葙の簾を、なかばは掲げ、なかばを敷き垂れている。かながらほとけといって、鉋で削ったかながらのような薄い木屑七片に、七つの仏の御名をしるして、その青すだれにさしならべる。

（中略）男の童は手ごとにしろうしを作ってもちあるいている。（「男鹿の島風」⁽⁷⁾）

・削りかけを盆の神とする習俗で、そこに仏教が混在して仏名が記され信仰されるようになっていく。盆の青棚は死者供養や先祖供養を含むが、本来は盆に降り来る精霊を植物の棚に寄りつかせ、祀ることに意味があった。

○十四日の朝、小豆の蒸飯（おこわ）に魚・山蓴など、あれこれと煮て、お燈明を照らした仏前に、この二品の膳をそなえた。しばらくしてから蒸飯を、なみなみとついで濁酒にかえて、うやうやしくぬかずき、退い

ては拝礼し「しずかに召れ」と女がいった。「男鹿の島風」⁽⁸⁾

・小正月の神祭りが先祖供養と結びついて、神の擬人化が明らかになった行事と思われる。「しずかに」という言い方が「心安らかに」という意味で用いられているから、先祖に語りかけることで、供養の意味を成立させている。能登半島の収穫後の儀礼であるアエノコトと共通する形式ではあるが、先祖供養が顕著であるため、意味は異なる。

○夕方、煮桑というものと、あるいは濁酒をつくって提（ひさげ・木製の片口）につぐいれ、それに稲穂一ふさをひたし、これを穂酒といって神前に供える。これは阿仁（北秋田郡）の山里で穂祭（かいほかい）という行事があるのとおなじく、古い習俗でめずらしかった。「男鹿の寒風」⁽⁹⁾

・山の神祭りにシトギを捧げる行為であるが、濁酒に稲穂を浸すのは豊作を願うことと思われる。シトギという米の粉を練ったものは山の神の神饌として強固な女性禁忌を有するが、それには触れられない。

※「寒風」後半を真澄は大地震の描写に費やしている。十月の初めまで地震は収まらず、湯本の温泉が止まり、笠矢の崎ではより多くの湯量が確認できたことを見聞している。

三 寺社縁起等について

○この海蔵山大竜寺にある竜毛で作ったという払子は遠い先祖から伝えられたものという。このような竜毛・竜髪といったものは世間に多くあり、ところどころで見かけた。竹生島（琵琶湖）の宝物のなかにあるという七難の陰毛（そそけ）（山姥の陰毛といわれる）というものの類であろう。温泉の社というものがある。遠いむかし、伊予の温泉のように、この辺もはげしい地震があつて、いまは湯が絶えたといわれる（中略）が、湯元の名から、もと出湯のあつたことが知られる。「男鹿の秋風」⁽¹⁰⁾

・女性の陰毛が信仰の対象となる場合がある。高貴な女性の陰毛が伸ばすと膝まであり、手を離すとくると丸まって元に戻るなどという。恐らくは「女の髪は象をも繋ぐ」と言われるように女性の髪の毛に何らかの呪力を感じたことが背景にあるだろう。

○自然石をたたんで御坂としていた。これも一夜のうちに鬼が集まって築いたという物語がある。伝え聞くところによると、景行天皇の御代、庚辰十年に、近江の竹生島と同じくわき出た山だという。紀伊の国熊野をうつして新宮・本宮になぞらえ、金剛・胎藏ふたつの峰として、いま真山・本山という。円仁（慈覚）大師が、仁明帝の承和四年（八三七）のころ唐にわたり、

文徳帝の仁寿の年（八五——五四）この山で修行され、天台の仏法をもつばら行なわれて、赤神山日積寺永禪院といったが、近世になって真言に改宗したという。

（男鹿の秋風）⁽¹¹⁾

・この記述には「鬼の建築」「一夜の工事」という二つの側面がある。良く知られた民話に「鬼の作った階段」があるが、これは鬼が超人的な力量で以て一夜の内に階段や橋等を作り、ようやく終わろうとした時に完成を恐れた人間が鶏の鳴き声を真似て、鬼を欺くという形式が伝わっている。

○真山という村がある。真山光飯寺という寺もあった。ここに左の方からはいると、摩般若堂・金剛童子堂がある。この堂の屋根裏は一万三千の地藏の像で葺いている。（「男鹿の春風」⁽¹²⁾）

・平安以降の末法思想の流布の元、三十三観音信仰や六観音など多くの神仏を巡ったり、集めたりして信仰する形態が進行した。観音による救済思想が六道において慈悲を以て人々を救済する六地藏信仰を成立させ、千体地藏など多くの地藏菩薩が寄進されるようになってきた。

○太上神仙の祠（妙見堂）に詣でた。奥には観世音菩薩をひめているという。この堂は大同年間、坂上將軍田村麿が斎い祀った（中略）古いものであったが、文祿（一五九二—九六）のある年に落雷して、宮のうち

に納めてあった数々の宝物も灰となった。（「男鹿の春風」）

・文中の妙見堂は現在の湯本星辻神社であり、当時の別当は亀尾山長福寺常楽院で男鹿半島北部で当時最大の勢力を誇った真言宗修験寺であった。西宮藤毅「秋田県温泉のしるべ」（明治二十七年）によると「湯本の平賀氏（古谷氏）は東北地方のエミシを征伐にやってきた坂上田村麿（七五八—八一）將軍の家臣と伝えている。田村麿が妙見の社堂を建てた功德により盥の水が化けて温泉になったともいう」と記載され、湯本温泉の成立と田村麿・妙見堂との関連を示す伝承が成立している。佐藤久治『秋田の山伏修験』によると常楽院の掠は相川村の観音堂・伊勢堂・阿弥陀堂、畑村の十二神堂・十王堂、湯本村の妙見堂・末社としての熊野堂・伊勢堂・十王堂、川口村の観音堂・伊勢堂・雷神堂・十王堂、渡鹿村の山王堂、浜間口村の熊野堂・伊勢堂、野村の天神堂・十王堂・伊勢堂・観音堂・相染堂・八竜堂と記している。佐藤は渡鹿を現在の戸賀であろうとし、また「絹篩」においても掠は十三村（戸賀・畠・浜塩谷・浜中・塩戸・加茂・青砂・黒崎・水口・野村・相川・北浦・湯元）とあるから、やはり戸賀と解釈される。

また、隣村の長応院も常楽院と同じく先達寺を甲

賀岩本院とするなど男鹿修験の発達に寄与する部分が大きかったものと思われる。神仏分離の際、妙見堂は星辻神社と呼び名を変え、末社十王堂は仏教色が濃く残り、地獄極楽思想に多くを依存していた為、分離当時はもはや痕跡も留めていない常楽院の山号と院号を被せて亀尾山常楽寺として現存している。

『男鹿市史（上巻）』には「湯元の星辻神社は妙見菩薩を正体とするものといひ、星を神格化した天之御中主神を祭神としている。」とあり、神仏分離に際して「天之御中主神」を祭神として祀ったのは妙見菩薩との集合によるものであるが、さらに以前には真澄が「太上神仙」とした北極星への信仰（北辰信仰）が存在した。妙見堂の地は北側に海を臨む丘陵地にあつて、北斗七星を仰ぐには適した位置にある。北極星を中心に季節により運行する星座を信仰の対象とした星辰信仰が成立し、発展するには好適な条件が備わっていた。渡来した星辰信仰は日本で北辰・北斗信仰として陰陽道に継承され、星の神々の動きにより占いが行われ、その後は仏教と集合して妙見菩薩として信仰されてきた。

湯本の妙見菩薩はしばしば漁船を止めてしまうという船止めの伝承が付随しているが、これも太上神仙の北辰・北斗信仰に関連するもので、真澄の記述

にあるように神仙と観音菩薩が集合して妙見菩薩を成立させたことになる。なお、真澄は観音菩薩について亀の背に立った立像であるとしているから、北方玄武との関連も指摘できる。

○三の女湯（三ノ目湯）の水が潜りて涼しい細流のあるところに、いくつもの鳥居が立つて無動尊を祀っている。名をしら神という（紀伊の国の白神の磯の名をはじめとして、しら神という名は陸奥の松前の白神が崎、津軽の深浦の近くにも白神が岳などがある。しら神とは白鳥をさしている、日本武尊を祀り、また雷神をも祀る。また白山を祀つて菊理姫を斎っている。また、繭の神をしら神という。白神という地名はたいてい多い）。（『男鹿の鈴風』⁽¹³⁾）

・養蚕の神・繭の神として知られるのはオシラ様・オシラ神である。真澄もここで繭の神をシラとして、オシラと関係づけている。日本書紀では養蚕技術と共に渡来した蚕を「韓神（からかみ）」と呼んで、人々が敬ったという記述がある。

東北地方で広く信仰されているオシラ様は家の神で、神体は一尺内外の木や竹の棒で、これに布を着せ、重ねる。巫女が両手に持つて祭文を語り、この神を遊ばせる。これをオシラアソバセと言う。多くは正月十六日を祭日とする。関東や中部地方ではオシラを蚕神とし、特に東京近郊では馬に乗った女人

像を描いた掛け軸を神体とする例が多い。この場合の祭日をオシラ講といい、多くは正月十九日で、女性のみのものである。真澄が「繭の神をしら神」としたのは後者の信仰についてである。

また、白山菊理姫はくくる神として水源や分水嶺を司る「水の女神」であるが、神仏分離以前は白山妙理大権現として信仰の対象となっていた。

○蝙蝠が窟に漕ぎよせて、柁でふなばたをたたくと、その音に驚いて、蝙蝠がむらむらと出てくるが、このなかには五色の蝙蝠がいるという。それで五色の蝙蝠は五頭の鬼になったという伝説があるのだろうか。

（男鹿の島風）⁽¹⁴⁾

・「中華五福」という言葉があり、五福は『尚書』中の「一は長寿、二は富裕、三は健康、四は徳を好む氣質、五は天寿を全うすること」に発し、一般的には福、禄、寿、喜、財を示す。蝙蝠の音から福が連想され、中国では蝙蝠は縁起の良い動物ということになっている。五色の蝙蝠とはこの五福に繋がった為に生まれた伝承である。蝙蝠と鬼の関係は明確ではないが、高野山宿坊に伝わる五鬼伝承との関連については今後の課題としたい。

四 男鹿のナマハゲ

— 真澄の見たナマハゲとの比較から —

①真澄が記録した「なまはぎ」

「男鹿の島風」「男鹿の寒風」には三カ所のナマハゲに関する記述がある。「島風」のナマハゲは旅程と記述の様子から聞き書きであるが、「寒風」における記録は実際の見聞に基づくもので、その年の正月を宮沢の漁師の家で過ごしたとあるから、宮沢のナマハゲであつたろう。これらの記述からは「火班たくり」のナモミハギという恐ろしさしか伝わってこない。新春を寿ぐ、祝いを述べる、豊饒への予言をするといった今日のナマハゲ行事が唱っているものが見えてこない。その後の吉田三郎『男鹿のこぼれだね』や高橋文太郎「男鹿のなまはぎ」では新春の祝いやナマハゲの口上としての祝いの要素が明らかに出現している。この間共通している内容は「火班に象徴される「怠け者を戒める」ことと餅を貰うことである。以下に真澄の記述と『遊覧記』の記述を引く。

「此嶋にて小児の泣ば、なまはぎが来といひてをびやかしぬ。これや、平城の元興寺に鬼ありしとて、がこじ、又ぐはんごなどいひてもてすかし、はた東路にてももくわ、みちのおくにてもつこといふは、蒙古国の襲ひ来るを懼れしがもとすなん。奈万半は正月十五

日の夜に、身の毛いやだつ斗丹塗の仮面を被き蠮螋ちふものを着て、手には疾刀を持て小篭を負て、その箱の内に物ありてからからと鳴らし、しはぶき、家ごとに入る。これをなまはぎといふ。冬籠もりして男女柴火にあたるに、肱、脛、みな赤班に火形のつきぬ。それをなまみ、なもみ、あるはなごみなどいふところあき。なごみはぎちふ事をしかいふにや、生肉剥ちふこととにや。浦山里の若背とて、人の奴僕等、あるは、わかきあるじの弟なども出まじらひて、かの脛の火文ある皮を、春は鬼の来つつちふ事にたぐえて、そのまねびなれば、童、としたかき女ども、おちて逃かくろふなどかたる。」

・この男鹿の島では小児が泣くと、「なまはぎが来た」といっておどかす。これは奈良の元興寺に鬼がいたといつて、そこではがごじ、またはぐわんごなどといつて童児をなだめすかすのも同じで、また東路でも、ももくわ（ももんが）とか、陸奥では「もっこがきた」といっておどかしている。もっこは蒙古国の来襲をおそれたのがもとであるという。なまはぎは正月十五日の夜に、身の毛もよだつようなおそろしい丹塗りの仮面をかぶり、けらみというものを着た男が、手に鋭い刃物を持ち、小箱を背負い、その箱のなかには物を入れて、からからと鳴らし、叫び声をあげながら、家ごとにはいつてくる。これを

なまはぎという。冬ごもりをして男女が囲炉裏の焚火にあたっているとき、股や脛に火形がつく。それをなまみ、なもみ、あるいはなごみなどというところがあったが、なまはぎはなごみはぎという意からでた名だろうか。また、生肉剥（なまみはぎ）ということであろうか。

新春になると現れるという鬼の姿に仮装して、この浦山里では若背といっている下男や、あるいは主人の若い弟などもまじり、このなまはぎになってこの脛に火形のある皮膚を剥ぐとおどしまわるので、童ばかりでなく、年輩の女たちも恐れて逃げかくれるのだ、と語っていた。（男鹿の島風）⁽¹⁵⁾

「正月十五日の夜深く、わかき男どもの集り、鬼の仮面、あるはいふ可笑とて空吹の、あるは木の皮の面に丹塗りたるをかけて蠮螋といふものに海苔てふ草を黒染としてふり乱し、手に小刀を持て、小篭の中に物ありて、ころころと鳴るを脇に掛けて、たたむきをいかり、蒲のはきまき、海苔のはきまきに雪杓をさしはき、人の家にゆくりなく飛入りてければ、あなおかな、なまはぎの来るとて、童の声も得たてず逃げまといかくろふ。なまはぎは寒さにたへず火にあたたりたる脛に赤のかたつけたるをいふなり。その火文は春は鬼の来て剥き去るちふ諺のあるにたくへて、しか鬼のさまして出ありくものなり。中国にて元興路の鬼をいひ、陸奥

などにもつことと蒙古国の襲い来るをいひ、此あたりにては生剥といひて童をすかしぬ。」

「夕ぐれふかう、灯下とりて炉のもとに円居してけるおりしも、角高く、丹塗の面に、海苔といふものを黒く染まして髪とふり乱し、といふものを着て、何の入らたらんか、からからと鳴る箱ひとつをおひ、手に小刀を持って、あとひてゆくりなう入り来るを、すはや生身剥よとて、童は声もたてずに人にすがり、ものの陰ににげかくろふ。これに餅とらせて、あなおかな、泣ななどとおどしぬ。」

・十五日（中略）突然、なまはげはいってきた。角が高い丹塗り（朱色）の仮面を冠り、黒く染めた海苔の髪をふり乱し、けら（肩蓑）というものを着て、何がはいっているのか、からからと鳴る箱をひとつ背負い、手には小刀を持って、「わあ」といいながら不意にきた。「それ生身剥だ」と、童はびつくりして声もたてず、人にすがりつき、ものの陰ににげかくれる。これに餅を与えると、「わあ、こわいぞ、泣くな」などとおどすのである。（「男鹿の寒風」⁽¹⁶⁾）

②ナマハゲにおける餅の意味

・餅を山苞と見ること

ナマハゲの餅と言えばナマハゲが貰った餅、或いはナマハゲの為に土産として用意した餅のことを言う。

明治以降のナマハゲ行事においては家に入ったナマハゲの為に膳を供え、一家の主人が歓待した後、立ち去る際に餅を持たせている。真澄の見たナマハゲは家人を脅かして餅を貰い、去っていく。この餅を土産に貰うということには様々な側面が考えられる。第一に餅はムラ・サトの新年を寿ぐ儀礼的な食品であって、他界（多くは山中）から降りてきたナマハゲには非常に貴重な食品となっている。山人がサトに降りて餅を所望するという説話は全国的に見られる。餅に対する来訪者の欲求が強いことは、サトの年魂としての餅を山に持ち帰ることに由来する。真澄の見たナマハゲも近世のナマハゲも餅を土産として持たせられるが、この土産にも大きな意味があるだろう。土産を持たせることは「もはや山に帰ってほしい」という意図が隠されている。餅を貰えば境界の外へ帰らなければならぬ。これは穏やかな神送りの形式となっている。

また、近年のナマハゲが新年の祝いと述べ、豊作や大漁の予言をするなど年占いの側面を持つているのに対して、真澄の見たナマハゲは文中から拾うのみでは家人を驚かしたり、戒めたりするのみである。この恐ろしいだけのナマハゲも餅を貰って山へ帰っていく。餅を貰うことの基本的な構図は修験の色合いを除けば真山神社ナマハゲ柴灯祭り（油餅の条）⁽¹⁷⁾に合致する。

・ナマハゲ行事における餅の役割

ナマハゲがなぜナマハゲと呼ばれるのか、その基本的な性格はどこにあるのか等様々な論述があるが、来訪の行為の根幹として「なぜやってくるのか」が問われる。新春を寿ぐ、家人を戒める、地霊を鎮める等の回答が用意されているが、来訪者がその姿を変容させて物貰いなどへと零落した場合、それを神零落のプロセスと見ることもできよう。しかし、来訪者が変容あるいは零落した場合でも、その核となる餅等の贈与(土産)は継続している。予言や言祝ぎがなくとも、家人を脅かすだけでもナマハゲにはサトへ降りてくる意味があるのであつて、それは姿を隠してサトを訪れるだけで山の年魂をもたらし、ムラはサトの年魂をナマハゲに持たせて帰すのである。いわば山とサトの交流が来訪と餅を通して行われることとなる。

③ケンデを境界に据えること

蓑装束と脛巾、仮面や変装といった来訪者の外面の変化を折口信夫は「こもり」の後の「やつし・やつす」と称したが、蓑屨さらに脛巾といった外面が遠方からの旅人を彷彿とさせ、来訪者は即ち旅人であろうとする感覚が成立している面がある。しかし、境界の外から貴重な神性を帯びた食物を目的としてムラの贈与に関わる来訪者の側面を無視することはできない。毎

年、時を定めてムラを訪れる来訪者を創出したのはムラであり、ムラの要求に応える形態の来訪者が存続してきたことは、旅人に年魂を贈与することよりも、ムラの心理的更新を目的としたと考えられる。旅人はムラにとっては来訪者であるが、「来訪者」が旅人であることは、外面からの拡大解釈であらう。

蓑や笠は象徴的な旅姿であるが、ムラビトの日常的な雨具でもある。この点からして日常を捨て非日常へと飛び込み、身を何者か分からぬ境界の外の存在とする意図が明らかになってくる。いわゆる隠れ蓑としての意味を所有する。ムラビトが来訪者を創出するためには、それらの隠れ蓑が必要となっており、また日常的な雨具であるために異装ではあるが、ムラビト全員との紐帯を象徴するものと成り得たのではないだろう。

真澄の記述には来訪後の蓑装束(ケンデ)をどう処理しているかの部分がない。今日のナマハゲ行事では多くの場合、ムラの境界まで運んで行き、その場に朽ち果てるのを待っている。秋田市豊岩のヤマハゲや雄和のタラ面とは異なり、男鹿の場合はその年毎に新穀の蓑で制作するものは現在ケンデのみであるから、ケンデを巻き付けることによってムラでは外との境界を再認識させる装置となる。道祖神、鹿島立てなどは

厄神を防御する為に境界に据えられることが多いが、ナマハゲの言動からして、このケンデが災厄防止の機能を持っているとは思われない。ナマハゲは餅を貰って去ることで、新年のけじめを形成しており、地理的な境界を出る際にはケンデを脱いで日常生活に立ち直ることが求められている。そこで若者達は境界にケンデを据えることで、ナマハゲは立ち去った、一年後にまたこの境界からムラへやってくることを示したものであると思う。

ケンデ以外にもナマハゲ行事の藁が呪力を持つことがある。ナマハゲが帰った後に家中に落ちている藁しべである。この藁を当日は掃かず、明朝掃除をする。これは元旦に箒を使うことを忌むことと同様に「福を掃き出す」として戒めるものである。箒には大切なものを掃き集める機能と余計なものを外へ掃き出す機能があるが、この場合は後者の働きを背景としている。この落ちた藁を頭に巻くと「一年中風邪をひかない」「一年間頭痛がしない」などと来年ナマハゲが来訪するまでの効能を保証する力があるとされている。

五 真澄の見たナマハゲ

— 昨今のナマハゲ行事との比較から —

時を定めてムラを訪れ、多くは新年の祝いを述べた

り、収穫に関する予言をしたりするなど行為を行う主体が「来訪者」である。これを迎える側は恐怖の対象としたり、欲待したりと凡そ様々な対応をなすが、概ね長くムラ内に留まることを期待してはいない。むしろ、多くは素早く境界外に立ち去ることを願っている。

前述の通り、真澄の見聞したナマハゲは荒々しく家人を脅したり、怠け者を戒めたりするのみで餅を貰って山へ帰る。明治以降のナマハゲは家人を脅かすことと同様に、正月にやってくる神として新春を寿ぎ、問答として目出度い予言をもたらす。この変容は「山のナマハゲ鬼」としての存在をムラが許容できず、ナマハゲに神性を持たせようと意図したためであろう。真澄の時代には「春来る鬼」というだけで山とサトとの交流ができていたものが、近世になってサトやムラの幸運や隆盛を願わなくては来訪がかなわなくなり、「鬼ではなく神である」ことへ移行してきたものだろう。こうして呼び方や行動を変化させることは山に比してムラの力が増大し、ムラに合ったナマハゲが出現してくる。これは時代の変化でもあるうし、来訪者そのものの変容・零落とも言える。

昨今は小正月の訪問者ではなく、大晦日の行事となり、また年中出現する観光ナマハゲもいる。またナマハゲ柴灯祭りのみがナマハゲの祭りとして誤解され、

観光客誘致の為に宣伝されている。

「小正月の訪問者」であるナマハゲについては多くの先行研究が存在し、その民俗的性格を祖霊、マレビト・マロウド、異人等の側面から検討されてきている。さらに、秘密結社や若者宿といった社会的組織構造からの論考も多々存在する。

更にナマハゲを含む来訪者が何処からやってくるのかを問うことは、いわゆる他界観を何処に求めるのかという問題と関連し、祖霊観念や祭場研究、境界の成立といった非常に大きな民俗学的問題へと発展する可能性を秘めている。

真澄の見た文化年間のナマハゲと比較すると高橋の記録したナマハゲではムラ側の論理に傾いた来訪者の変容が察せられる。近年の社会の急激な変容と地方の疲弊の中で、ナマハゲ行事そのものはムラの要求に沿ってどのような変化を見せていくのか。男鹿半島やナマハゲについての記録は未だ途上にある。

【註】

- (1) 「男鹿の秋風」一四—六頁 同 一六—二二頁
- (2) 「男鹿の秋風」二六—七頁
- (3) 右同 三一—二頁
- (4) 右同 四八頁

- (5) 「男鹿の春風」一〇—一二頁 同 一二頁 同注一一（一六頁）

「男鹿の鈴風」一二〇頁

- (6) 「男鹿の鈴風」一一八頁

- (7) 「男鹿の島風」一三〇—一頁 同注三・四（四—二頁）

右同 一三三頁

- (8) 「男鹿の寒風」一四八頁 同注二（二五九—六〇頁）

- (9) 「男鹿の秋風」二六—七頁

- (10) 右同 三五頁

- (11) 右同 四〇頁 「男鹿の春風」九九頁

- (12) 「男鹿の鈴風」一二五頁

- (13) 「男鹿の秋風」三九頁 「男鹿の島風」一三五—六頁 同

注一〇・一一（一四三—四頁）

- (14) 「男鹿の島風」一三九—四〇頁

- (15) 「男鹿の寒風」一五七—八頁 同注一五（二六三頁）

- (16) 右同 一五五—六頁

【参考文献】

- 「男鹿の秋風」『菅江真澄遊覧記』一〇—五八頁
- 内田武志・宮本常一編訳 平凡社二〇〇〇年八月
- 「男鹿の春風」右同九二—一一六頁
- 「男鹿の鈴風」右同一一七—二九頁
- 「男鹿の島風」右同一三〇—四五頁
- 「男鹿の寒風」右同 一四六—六四頁

男鹿のナマハゲ系儀礼における観光と民俗

— エコミュージアムの視座を通して —

平 辰彦

はじめに

本稿では、「ナマハゲ系儀礼」を「小正月の晩におこなわれる、鬼もしくはそれに類する恐ろしい仮面・異装の行事」（小松和彦）と規定し⁽¹⁾、中国やヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」と比較しながら、昭和五十三年（一九七八）に国の重要無形民俗文化財の指定を受けた男鹿の「ナマハゲ系儀礼」の諸相を、〈エコミュージアム〉の視座から考察する。

一 菅江真澄の見た「ナマハゲ」の民俗と仮面

この「ナマハゲ系儀礼」は、日本においては、北は青森から南は沖縄の宮古島に至るまで全国的に分布している⁽²⁾。図一は、全国に分布する「ナマハゲ系儀礼」

の主なものをまとめたものであるが、この図から「ナマハゲ系儀礼」の多くが、海岸線上にひとつの「ナマハゲ文化圏」とも呼べる場を形成していることがわかる。

菅江真澄（一七五四—一八二九）は、この「ナマハゲ系儀礼」を、文化八年（一八一二）の正月に若美町で見聞している。真澄が見聞した「ナマハゲ」についての記述は、『牡鹿の寒かぜ』に収められている⁽³⁾。これが、文献上にあらわれた「ナマハゲ」の初出である。

そこには、「ナマハゲ」を描いた挿絵と共に次のような一文が添えられている⁽⁴⁾。

正月十五日の夜深く、わかき男どもの集り、鬼の仮面、あるはいふ可笑^{ツカシ}とて空吹^{ソシエテ}の面、あるは木の皮の面に丹ぬりたるをかけて、螻蛄といふものに海苔てふ艸を黒染としてふり乱し、手に小刀を持

て、小笛の中に物ありてころ／＼と鳴るを脇に掛て、たゝむきをいからし、蒲のはきまき、海苔のはきまきに雪沓をさしはき、人の家にゆくりなう飛入りてければ、あなをかな、なまはきの來るとて、童の聲も得たてす迹まといひかくろふ。

奈万波義は寒さにたえず火に中りたる脛に赤斑のかたつけるをいふなり。その火文を春は鬼の來て剥き去るちふ諺のあるにたくへて、しか鬼のさまして出ありく生身剥ちふもの也。中國にて、かんとて元興寺の鬼をいひ、陸奥などにて、もつこととて蒙古國の襲ひ來るをいひ、此あたりにては生剥をいひて童をすかしぬ。

この一文で述べられている「鬼」の面は、挿絵を見ると、赤く、角が二本あり、「空吹」の面は、緑色で角がなく、赤いハチマキをしている。この二匹の「ナマハゲ」は、夫婦であるといわれ、赤い「鬼」の面をつけているのが男性であり、緑色の「空吹」の面をつけているのが、女性であると考えられている。

菅江真澄は、この一文で「ナマハゲ」を「春來る鬼」と捉え、その名称が、炬の火にあたり過ぎて出来た「火がた」（赤斑）を意味する「ナモミ」を剥ぐところから「生身剥」（ナマミハギ）といわれるようになったと述べている。

真澄の描いた「ナマハゲ」の「鬼」の面は、国東半島で現在もおこなわれている「修正鬼会」の「鬼」の面と類似している。この「修正鬼会」は、修験者の宗教的行事が伝承されているものだが、それと「ナマハゲ」の「鬼」の面が類似しているのは、「ナマハゲ」の民俗行事そのものが、もともと修験者の宗教的行事から発生したものであることを示唆している。秋田県象潟町の小滝でおこなわれている「アマノハギ」の行事は、「ナマハゲ系儀礼」のひとつだが、そこでは、鳥海山修験の番楽面が「アマノハギ」の面として代用されている。この小滝には、「延年チヨークライロの舞」が伝承されており、そこには、修験者による「延年」の痕跡が認められる。「アマノハギ」に用いられている「番楽」の面にもその修験者の影響が強くあらわれている。この面は、金峰神社に所蔵されており、阿形と畔形が対になっているが、番楽では、大江山の「赤鬼」と「青鬼」を表象している。

また山形県遊佐町の女鹿地区や滝の浦地区では、鳥海山修験の番楽面が、「アマハゲ」の面として代用されている⁽⁵⁾。その面は、「鬼」の面と「翁」の面とがある。このことから「ナマハゲ系儀礼」の面には、来訪する「鬼」と「翁」の双極的な性格があり、それは、「神」の依代とも考えられ、「演劇的機能をもつ変身の装置」でもあった⁽⁶⁾。

二 民俗行事と観光文化の「ナマハゲ」

中世から近世を通じて現在の男鹿市（旧男鹿市・旧若美町）と潟上市（旧天王町）は出羽国小鹿島を形成し、旧男鹿市・旧若美町・旧天王町の三地域では、「ナマハゲ系儀礼」は「お山の信仰」を共通の基盤に持ちながら行われていた。鎌田幸男によれば、この三地域では、古くから男鹿の「ナマハゲ文化圏」が形成されていたとい⁽⁷⁾。

この三地区には、真山や本山に対する「お山」の信仰が色濃く残っており、この「ナマハゲ文化圏」では、現在も大晦日に「ナマハゲ系儀礼」が実施されているが、以前は、どの地区も旧暦の小正月の晩におこなわれていた。

男鹿市真山地区の「ナマハゲ」も現在、大晦日に実施されているが、この地区の「ナマハゲ」は、今なお古来の形態をとどめ、角のない独自の面が用いられている。男鹿では、このような民俗行事としての「ナマハゲ」が、各地区ごとに大晦日におこなわれているが、この行事とは別に観光文化としての「ナマハゲ」が、現在も定期的におこなわれている⁽⁸⁾。

この観光文化としての「ナマハゲ」を大別すると、(A)「公然の観光空間」でおこなわれる「ナマハゲ」と

(B)「暗黙裡の観光空間」でおこなわれる「ナマハゲ」に分類することができる⁽⁹⁾。

(A)「公然の観光空間」(overt tourist space)とは、ホストである地元の観光提供者が人為的に再現した場面を積極的に演出し、その演出を観光客が意識してみる観光状況の空間をいう。毎年、二月に実施されている「ナマハゲ柴燈(せど)まつり」は、この「公然の観光空間」でおこなわれる観光客のためのアトラクションである。

(B)「暗黙裡の観光空間」(covert tourist space)とは、ゲストである観光客がホストの演出に気づかず、それをあたかも本物の民俗行事の「ナマハゲ」が再現されたものとして受け入れる観光状況の空間をいう。定期的におこなわれている男鹿真山伝承館の「ナマハゲ」の実演は、この「暗黙裡の観光空間」でおこなわれる観光客のためのアトラクションである。

男鹿の「ナマハゲ柴燈まつり」では、「ナマハゲ踊り」(一九六二)や「ナマハゲ太鼓」(一九七五)などが実演されるが⁽¹⁰⁾、これらのアトラクションは、本来の民俗行事「ナマハゲ」にはなかったものであり、観光客を集客するために新たに創作された観光文化とし

ての「ナマハゲ」のアトラクションである。

また男鹿真山伝承館でおこなわれている「ナマハゲ」の実演も、観光客を対象とするアトラクションだが、その仮面や装束は、真山地区で大晦日におこなわれている「ナマハゲ」行事で使用されるものと同じであり、観光客は、このアトラクションを本物の「ナマハゲ」行事として受け入れ、「ナマハゲ」の凄まじい迫力に圧倒され、満足して観光地の男鹿を去っていくのである。

男鹿の「ナマハゲ」は、このように観光客の「まなざし」の中で次第に観光客を満足させうる芸術的なパフォーマンスとして上演されるようになり、現在では、男鹿の観光には欠かすことの出来ない重要な観光資源となっているのである。

三 中国の漢の武帝と男鹿の赤神伝説

男鹿の「ナマハゲ系儀礼」は、真山を中心に観光化が進み、観光客に〈見せる〉ための「ナマハゲ」が観光文化として創造されている。しかし、本山では、中国の漢の武帝にまつわる「武帝嶋」や「五杜堂」をはじめ、「ナマハゲ」の起源と関連して語られる「鬼」の造った石段が現存しながら、こうした景観が、観光

資源として十分に活用されていないのが実情である。

図二は、漢の武帝が、五色の蝙蝠の使者と共に男鹿に飛来したときに、男鹿の人々が漢の武帝に舞をみせたと伝承される「舞台嶋」である⁽¹¹⁾。ここは、「武帝嶋」ともいわれている。この「武帝嶋」は、折口信夫が、「ケタ」と呼んだ場所だと考えられている⁽¹²⁾。折口信夫は、「春来る鬼」で海の彼方から来るものは、まず「ケタ」と呼ばれる場所に上陸し、それから山に登り、「山神」になると考えたが⁽¹³⁾、そうした来訪神としての「春来る鬼」の伝説は、今も男鹿の人々によって伝承されている。

図三は、赤神神社に所蔵されている「漢武帝飛来之図」と呼ばれる掛け軸である。中央に漢の武帝が白鹿とおり、横には、西王母が漢の武帝に桃を差し出している。そのまわりには、五色の蝙蝠が描かれている。この画像には、中国の絵画の技法が認められ、中国の招来物ともいわれている⁽¹⁴⁾。

中国では、「鹿」は「禄」と同音同声をもつ画題として取り上げられることが多く、「蝙蝠」の「蝠」の字が、「福」と同音同声の発音をもつことから「蝙蝠」と「白鹿」と結びつけて「福禄」と解し、「民福増進の縁起物」として喜ぶのである⁽¹⁵⁾。

また「五色」の「蝙蝠」の「五」という数字は、「陰陽五行説」に基づいており、「漢武帝飛来之図」は、

中国の絵画や信仰の影響が強く認められる。

さらに本山の開山縁起によれば、この漢の武帝が、「赤神」となり、「五色」の蝙蝠が「五」匹の「鬼」となり、本山の石段を造ったと伝えられている⁽¹⁶⁾。男鹿の昔話として現在も語り継がれている「九百九十九の石段」は、全国的にみられる「九十九伝説」のひとつだが⁽¹⁷⁾、この男鹿の話とよく似た伝説が、国東の「修正鬼会」のおこなわれている地域でもみられるのは、興味深いことである⁽¹⁸⁾。

男鹿の赤神神社所蔵の「赤神」に関する縁起には、こうした「五鬼」のことが、次のように記されている⁽¹⁹⁾。

五鬼とは眉間、逆類は夫婦、眼光鬼、首人鬼、押領鬼は三兄弟三子也。眉間、逆類は死亡して得道す。三鬼は今に死せずして、男神は窟、女神は岩屋、海邊の岩屋に住す。

ここに記された「五鬼」のうち「兄弟三子」の「鬼」は、「赤神」とその妃と共に本山の中腹にある「五社堂」に祀られた。この縁起では、「五社堂」の「赤神」の本地は、「薬師如来」であり、この神は、慈覚大師によって祀られたと記されている。『慈覚大師伝』によれば、円仁が祀った神は、中国の異神「赤山明神」

であり、男鹿では、この「赤山明神」を「赤神」と称していたのである⁽²⁰⁾。

男鹿には、こうした「赤神」を祀る「お山の信仰」が現在も息づいており、そうした信仰を背景に「ナマハゲ系儀礼」が村々で親から子へ、代々継承され、現在に至っているのである。

四 男鹿の観光資源と「エコミュージアム」

わたしは、「ナマハゲ系儀礼」の成立に深くかわる「五社堂」などの男鹿の観光資源を活用し⁽²¹⁾、「エコミュージアム」の考えを導入し、男鹿半島全体をまるごと博物館と捉え、地元住民の参加をもって「ナマハゲ・エコミュージアム」の構想を実現していきたいと考えている⁽²²⁾。

「エコミュージアム」の構想とは、地域固有の資源を文化遺産と捉え、人間とそれを取り巻く環境との調和をめざし、町全体をまるごと博物館と考える新しい町づくりの考え方である。この「エコミュージアム」の構想は、一九六〇年代後半にフランスで誕生し、世界各地に広がっていった。この考え方では、原則として資料の収集が否定され、現地における保存・展示が基本となっている。そしてこの「エコミュージアム」

では、行政と住民とが一体となって発想し、形成し、運営していくことが基本となっている。

この「エコミュージアム」では、資料の現地保存が原則となっているので、対象となる資料の分布範囲を定め、その区域内を「テリトリー」と呼ぶ。その「テリトリー」には、中核となる本部的機能を果たす博物館を設置し、そのまわりに「サテライト・ミュージアム」と呼ばれる地域の特性を代表する文化遺産を設定する。その「サテライト・ミュージアム」をめぐる小道は、「発見の小径」と呼び、その道を地元の「エコミュージアム・ガイド」が観光客たちを案内する。このように「エコミュージアム」の構想では、自然を核にしながら、それを地域振興に結びつけ、地域全体を活性化させる働きをもっている。

山形県の朝日町は、平成元年（一九八九）より「朝日町エコミュージアム協会」を結成し、その二年後には、「朝日町エコミュージアム基本構想」をまとめている。

わたしは、この朝日町にならって男鹿においても「ナマハゲ」を核とした「エコミュージアム構想」を実現したいと考えている。

秋田県教育委員会では、平成十六年（二〇〇四）から平成十八年（二〇〇六）の三か年九コースで実施した文化財探訪ツアーのパンフレットをもとに、コース

ごとのおもな文化財をまとめた「秋田はまるごと博物館 文化財探訪マップ」を平成十九年（二〇〇七）三月に刊行しているが、この「秋田はまるごと博物館」の考え方は、私の提唱する「エコミュージアム」の基本方針を示すものである。この九コースの中には、「男鹿半島荒ぶる神々の里コース」もある。そこには、赤神神社の「五社堂」をはじめ、国の重要無形民俗文化財に指定されている男鹿の「ナマハゲ」も紹介されている。

またこの冊子では、ボランティアガイド等の情報が提供されており、このツアーに参加した参加者のナマの声も紹介されている。今後もうこうした「秋田はまるごと博物館」と考える「エコミュージアム」の構想が、県全体で検討され、推進されていくことに大きな期待を寄せている。

五 「ナマハゲ」の原像をめぐる諸説

男鹿の「ナマハゲ」は、本山や真山の「赤神」の縁起にみられるように「神」と「鬼」の二つの側面が認められるが、民俗学者の柳田國男と折口信夫もこの二つの側面に注目し、それぞれの視点から「ナマハゲ」の原像に迫っている。

柳田國男は、「ナマハゲ」を「小正月の訪問者」と捉え⁽²³⁾、そこに「祖霊」としての性格を認め、折口信夫は、「ナマハゲ」を「春来る鬼」と捉え⁽²⁴⁾、そこに「マレビト」の性格を認めた。

折口によれば、古代においては、「鬼」には角がなく、「常に姿を現さず」、それは、「霊の集中することによつて巨大な姿を現すもの」であり、最も原始的な「鬼」は、「村々の祖先の霊」であつたという⁽²⁵⁾。折口は、男鹿の「ナマハゲ」行事を通して角のない「鬼」は、古代人の生活に生きる「鬼」を表象しており、それは、「巨人」を意味し、さらにそれ以前は、「村々の祖先の霊」であつたという仮説を立てている。そして折口は、この「春来る鬼」が、「海から来る」「マレビト」であると考えているのである⁽²⁶⁾。

この「マレビト」を折口は、「古代生活の研究」（常世の國）の中で次のように述べている⁽²⁷⁾。

祖先の使ひ遣した語で、私どもの胸にもまだある感觸を失はないのは「マレビト」といふ語である。「まらうど」と言ふ形をとつて後、昔の韻を失うて了つた事と思はれる。マレビトの最初の意義は、神であつたらしい。時を定めて來り臨む神である。大空から、海のあなたから、或村に限つて、富みと齡と其他若干の幸福とを齎して來るもの

と、村人たちの信じてゐた神の事なのである。（中略）此マレビトなる神たちは、私どもの祖先の、海岸を逐うて移つた時代から持ち越して、後には天上から來臨すると考へ、更に地上のある地域からも來る事と思ふ様に變つて來た。古い形では、海のあなたの國から初春毎に渡り來て、村の家々に、一年中の心躍る様な豫言^{カネゴト}を與へて去つた。

折口は、ここで「マレビト」を「海のあなたの國から初春毎に渡り來て、村の家々に一年中の心躍る様な豫言^{カネゴト}を與へて去つた」「時を定めて來り臨む神」と考へている。そしてこの「神」は、音を立てて村の家々を訪れる「ことぶれの神」であり、「常世のマレビト」であり、「春の鬼」であると説く⁽²⁸⁾。

柳田・折口以後、「ナマハゲ」の始原的研究は、こうした民俗学的アプローチの他に、文化人類学的視点による研究もあらわれた。その代表が、岡正雄の「異人」説である。折口が、「マレビト」と規定した「ナマハゲ」を、岡は、「異人」と呼ぶのである。岡は、先ず、日本民族の文化が「重層」「混合」「併存性」によつて形成されていると考える⁽²⁹⁾。そして日本の神道における「神」の出現には、著しく対照的な二つの形態があると指摘する。すなわち(A)「垂直的に表象するもの」と(B)「水平的に表象するもの」である⁽³⁰⁾。(A)は、

「神は天上にあり、人間界への出現は降臨の形をとり、山上・森・樹梢に降下してくる」というものであり、(B)は、「神は妣の国あるいは地下界にあり、彼方・彼岸から村々に訪れてくる」というものである。岡によれば、(A)は、「天神信仰」に基づくもので、「父系祖先のおよび英雄神的」傾向が強く、それは、「朝鮮半島から中央アジア、シベリアの諸民族に顕著に現われている」という。(B)は、「神」を「神―祖霊―妖怪」

の姿において表象し、「母系祖先的色彩の強い血縁的祖先崇拜」の傾向が著しく、「東南アジアおよびオセアニアの古文化」にみられるという。また(B)は、「仮面・仮装の異形の来訪者を祖先・祖霊」とみる、いわゆる「原始秘密結社の宗教・社会形態」で、その分布は、「メラネシアやニューギニア」にみられるという。

岡は、この二つの形態のうち、(B)の「母系的・秘密結社の」形態には、おそらく「芋栽培―狩猟文化」があつたと想定する。そして岡は、このメラネシアやニューギニアにみられる種族文化と男鹿の「ナマハゲ」に代表される「ナマハゲ系儀礼」の文化を比較し、その類似点を指摘し、「ナマハゲ系儀礼」は、「母系的・秘密結社の・芋栽培―狩猟文化」に属すると指摘した。岡は、「異人」と呼ばれる「ナマハゲ」が、「東南アジア大陸のどこからか南海に流入」し、その「一分

流が南部中国を経て、日本列島」へ渡来したと考えるのである⁽³¹⁾。

この岡の説は、「ナマハゲ系儀礼」の民族学的比較研究の先駆をなすもので、その学史的意義は、きわめて大きい。日本各地の「ナマハゲ系儀礼」の比較を飛び越えてメラネシアとの比較を試みるのは、いささか研究方法として問題があるように思われる。

文化人類学者の大林太良は、こうした岡の「異人」説の問題点を踏まえて「ナマハゲ系儀礼」の文化的背景を考察し、そこに子供としての少年が〈死〉に、大人として〈再生〉する「成年式」の要素があることに注目し、「ナマハゲ系儀礼」には、「脱皮のモチーフ」があると指摘する⁽³²⁾。

「ナマハゲ系儀礼」の始原的研究は、このように民俗学や文化人類学の視座から考察されてきたが、未だに定説がない。しかし、近年、中国や朝鮮などの民俗行事の研究が進み、「ナマハゲ系儀礼」も、アジアという視座から比較研究されるようになってきた。平成二十年(二〇〇八)十月には、秋田県大仙市において第十回国際アジア民俗学会が開催され、中国や韓国をはじめ、台湾、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイなどの民俗学の研究者が一同に集結した。このような機会にアジアの中の「稲作文化圏」の「ナマハゲ系儀礼」を、各国の研究者と共同で研究することによって

新たな発見があるかもしれない。「ナマハゲ系儀礼」の研究も二十一世紀に入り、「ローカル」な研究から「グローバル」な研究へと国際的な広がりを見せ始めている。

六 中国の「ナマハゲ系儀礼」と「鬼」の信仰

日本をはじめ、中国、韓国などの東アジアは、稲作文化圏であるため、類似した年中行事が認められる。特に季節や年の変わり目に村々を来訪する「鬼」が「福」を招く来訪神であるという信仰は、「ナマハゲ系儀礼」に共通して認められる。

中国でおこなわれている「儺戲」（なぎ）では、「鬼」が登場するが、その「鬼」は「祖霊」としての性格が強く、江西省の石郵村では、「鬼」は、「祖先を模した仮面を被った人」をあらわす⁽³³⁾。

この「儺戲」は、旧暦の一月一日から十六日までおこなわれる。この村の「儺戲」は、明代の宣徳年間（一四二六—一四三五）に広東の潮州から持ち込まれ、村の有力者（呉家）の繁栄を祈って始められたとされる。

この村の「儺戲」に登場する「鬼」は、周代の『周礼』（卷三十一）に記述されている方相氏以来の「儺戲」の古い形態を保っているといわれている。

方相氏は、中国の「鬼」の祖とされ、四つ目の恐ろしい仮面をつけ、災いを祓う儀式をおこなったといわれている。この方相氏の「方相」は、「四方を見る」という意味と、「四方を祓う」という意味があり、方相氏は、葬送にあたって「辟邪逐疫」の役割を負っていた。

日本にこの方相氏の名があらわれるのは、『元興寺縁起』によれば、推古元年（五九三）正月である。そして「鬼」を追う儀礼が、日本でおこなわれたのは、『続日本紀』によれば、慶雲三年（七〇六）十二月である。

室町時代の『公事根源』では、「鬼」を追う存在の方相氏が、四つ目の恐ろしい面をつけているために方相氏自身が、「鬼」と一体化され、認識されるようになった。こうして方相氏＝鬼という図式が、この時代に形成されていったのである。

日本の「鬼」は、このように中国の方相氏が変容し、日本化されたものである。中国の「儺戲」が日本に受容され、やがて「追儺」の「鬼」が考えられるようになり、「ケガレ」の意識を伴った「辟邪の力」をもつ異形の存在として日本の「鬼」が誕生したのである⁽³⁴⁾。

男鹿の「ナマハゲ」は、この中国の方相氏が登場する「儺戲」にまで遡ることができまる。現在、「ナマハゲ」の仮面は、「鬼」の面がほとんどだが、以前は、

四つ目の方相氏を思わせる仮面が男鹿でも使用されていた。男鹿の小浜地区では、その四つ目の「ナマハゲ」の面が現存する。

男鹿の「ナマハゲ系儀礼」を、このように中国の「鬼」の儀礼と比較してみると、その「ナマハゲ」の伝承や仮面の形態などに類似点が多く、その源流に中国の「鬼」の儀礼との接点が想定できる。

中国に代表されるアジアの「鬼」の系譜に連なる「ナマハゲ」は、日本の修験道をはじめ、陰陽道、天台宗や真言宗の密教、熊野信仰や十王崇拜などの重層的な影響を受け、村落社会の秩序を再強化させる機能を持ち、その仮面には、「鬼」としての側面と「神」としての側面の二面性を常に有しているのである。

七 ヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」の諸相

ヨーロッパの文化は、キリスト教の文化が基層にあるが、それは、単一の文化ではなく、古代ギリシャ・ローマの文化やゲルマン文化などが重層的にかさなり、形成されたものである。

ヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」には、キリスト教伝播以前の古代アニミズムに基づく民俗的習俗が多く残っており、そこで用いられる仮面には、ジャンニル

イ・ペドゥアンが『仮面の民俗学』で述べているように「異教的な古代信仰の影響」が認められる⁽³⁵⁾。

アルプス地方を中心としたオーストリアやスイスなどには、「鬼」のような形相をした仮面を用いる冬の民間信仰に根ざした「ナマハゲ系儀礼」が今もおこなわれている。ヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」には、例えば、オーストリアのミッテンドルフの村でおこなわれる「聖ニコラウス祭」がある。このまつりには、聖ニコラウスのお伴として「克蘭プス」と呼ばれる「鬼」のような仮面をつけた者があらわれる。

この「克蘭プス」は、かつては「ナマハゲ」のように季節の変わり目に人々の前にあらわれ、人々に平安をもたらし、穀物の復活を祈る来訪神だった。

またスイスのウルナツシュ村の大晦日には、「クロイセ」と呼ばれる来訪神のまつりがおこなわれている。この「クロイセ」は、大晦日に村の家々を歩きまわり、それぞれの家の〈悪〉を追い払い、新年の繁栄を祈る。

さらにブルガリアのシロカ・ルカ村では、「クツケリ」というまつりがおこなわれている。ここでは、「クツケリ」と呼ばれる伝説上の凶暴な神をあらわす仮面をつけた者が、村のメイン・ストリートを行進する。「クツケリ」は、このまつりでは、新春の「トリックスター」の性格をもった文化英雄であり、その行事に

は、日本の「田遊び」を彷彿とさせる農耕の〈予祝儀礼〉が認められる。

ヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」では、このようにわが国の稲作文化と共通する〈予祝〉の行事がおこなわれている⁽³⁶⁾。

以上のようにヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」に登場する「克蘭プス」をはじめとした「クロイセ」や「クツケリ」は、男鹿の「ナマハゲ」や中国の「ナマハゲ系儀礼」に登場する「鬼」のように〈仮面仮装の訪問者〉という形で村の家々を訪問し、災いを祓い、〈福〉をもたらす来訪神なのである。

平成九年（一九九七）五月、男鹿で開催された「世界の鬼フェスティバル」では、「克蘭プス」をはじめ「クロイセ」や「クツケリ」が男鹿に集結し、東西の「ナマハゲ」がそれぞれの国の儀礼を「観光アトラクション」として実演した⁽³⁷⁾。その集客数は、三日間で五千百名と報告されている。

おわりに

ヨーロッパの「ナマハゲ系儀礼」には、中国の「ナマハゲ系儀礼」と同様に〈祭祀的・信仰的要素〉と〈秘密結社的・社会的要素〉と〈祝福芸的・民俗芸能的要素〉が認められる⁽³⁸⁾。

各地域の特色をもった「民俗行事」の「ナマハゲ」は、こうした要素が複合されながら、各地域の人々によって伝承され、現在に至っている。しかし、地域の人々が急激な社会変化と同じ文化的文脈を共有しない観光客の〈まなざし〉を強く意識した時、東西における「ナマハゲ系儀礼」の〈観光化〉が進んでいったと考えられる。

観光の現場でホストとゲストが会合する観光文化としての「ナマハゲ」が、それぞれの地域で観光資源として再創造されていったのである。その代表が、男鹿の「ナマハゲ柴燈まつり」と真山伝承館における「ナマハゲ」行事の実演である。

また平成九年（一九九七）五月、男鹿で開催された「世界の鬼フェスティバル」は、男鹿の〈ローカル〉な「ナマハゲ」に〈グローバル〉な色彩を添えた観光アトラクションであった。

男鹿の「ナマハゲ」は、国の重要無形文化財としての民俗行事だが、観光客を受け入れるホストと観光客であるゲストとの関係を観光現象においてとらえる観光人類学の視座から考察すると、それは、〈グローバル〉な要素と〈ローカル〉な要素が複合された〈グローバル〉な観光資源であり、秋田県を代表する観光文化といえるものである。

註

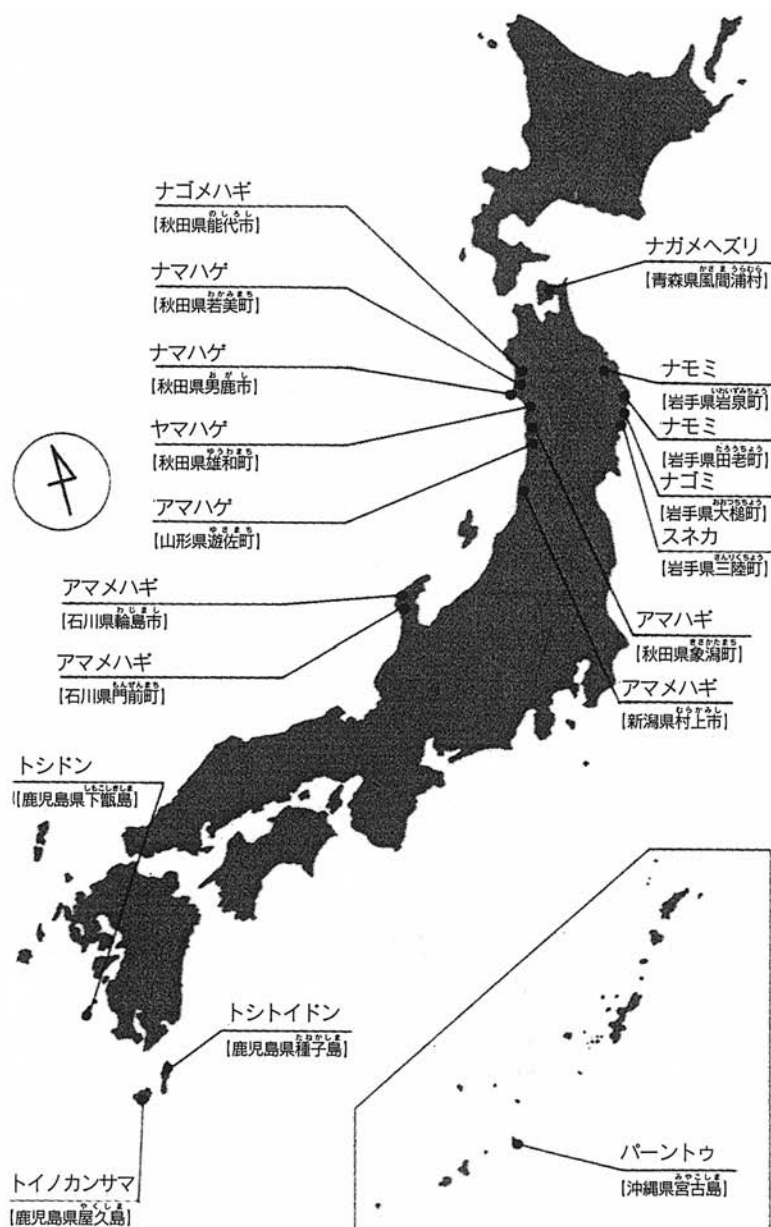
三十四—四十頁参照。

- (1) 小松和彦「簀着て笠着て来る者は……もう一つの『まれびと』論に向けて―」、『怪異の民俗学』④ 鬼、河出書房新社、二〇〇〇年、一〇六頁。
- (2) 北上市立鬼の館編『第七回企画展 小正月の来訪者』、北上市立鬼の館、一九九七年、二十頁。図一参照。
- (3) 菅江真澄「牡鹿の寒かぜ」、図絵「九一六」『生身剥』参照。『菅江真澄全集』、第四卷、未来社、一九七三年。
- (4) 菅江真澄「牡鹿の寒かぜ」、『菅江真澄全集』、第四卷、本文二六〇頁。
- (5) 平辰彦「ナマハゲ系儀礼の来訪する〈鬼〉と〈翁〉のドラマツルギー―男鹿のナマハゲと遊佐のアマハゲの仮面を中心に―」、『演劇映像』、第四十六号、早稲田大学演劇映像学会、二〇〇五年、二十七—三十六頁参照。
- (6) 平辰彦「ナマハゲ系儀礼の来訪する〈鬼〉と〈翁〉のドラマツルギー―男鹿のナマハゲと遊佐のアマハゲの仮面を中心に―」、三十二頁。
- (7) 鎌田幸男「生きているナマハゲの伝説」、『ナマハゲ―その面と習俗―』、日本海域文化研究所、二〇〇四年、一〇八頁。
- (8) 平辰彦「秋田の民俗行事と観光文化の比較研究―文化人類学的視点を通しての『ナマハゲ』まつり―」、『日本国際観光学会論文集』、第十四号、日本国際観光学会、二〇〇七年、
- (9) 平辰彦「世界の〈鬼〉フェスティバルにおける比較研究―男鹿の〈ナマハゲ〉と〈鬼〉の観光アトラクションをめぐって―」、『ノースアジア大学国際観光研究』、創刊号、ノースアジア大学総合研究センター国際観光研究所、二〇〇七年、七十九—八十頁参照。
- (10) 鎌田幸男「民俗と観光―ナマハゲ行事から―」、『雪国民俗』、第三十二号、ノースアジア大学総合研究センター内雪国民俗館、二〇〇七年、一—十二頁参照。
- (11) 図二参照。
- (12) 鎌田幸男「男鹿のナマハゲの考察―柴燈祭事の視点から―」、『なまはげ研究紀要』、男鹿のなまはげ保存伝承推進委員会、一九九八年、四五頁。
- (13) 折口信夫「春来る鬼」、『折口信夫全集』、第十七卷、中央公論社、一九九六年、一二九—一三〇頁。
- (14) 塩沢裕二「男鹿赤神社所蔵『漢武帝飛來図』」、『法政史論』、十七、一九八九年、一頁および十九頁。図三参照。
- (15) 大槻憲利「男鹿本山・真山と山麓の修験道」、『山岳宗教史研究叢書七 東北霊山と修験道』、名著出版、一九七七年、二四三頁。
- (16) 図四参照。
- (17) 秋田県国語教育研究会編『秋田のむかし話』、日本標準、一九七四年、一二九—一三三頁。
- (18) 和歌森太郎編『くにさき―西日本民俗・文化における地位

- 、吉川弘文館、一九六〇年、三六〇頁。
- (19) 川副武胤・新野直吉校注『神道大系神社編二十八 出羽國』、神道大系編纂会、一九九〇年、一六五頁。
- (20) 平辰彦「男鹿のナマハゲにおける仮面の源流考—摩多羅神と外来芸能の影響をめぐって—」、『民俗芸能研究』、第三十五号、民俗芸能学会、二〇〇二年、五十六—五十八頁。
- (21) 図五参照。
- (22) 平辰彦「地域における大学博物館の課題と展望—ミュージアムのエデュティメントをめぐって—」、『雪国民俗』、第三十二号、ノースアジア大学総合研究センター内雪国民俗館、二〇〇七年、六十四—七十頁参照。
- (23) 柳田國男「をがさべり」、『定本 柳田國男集』、第二卷、筑摩書房、一九六二年、一二三—一二五頁。
- (24) 折口信夫「春来る鬼—秋田にのこる奇習—」、『折口信夫全集』、第十七卷、一三七—一四一頁参照。
- (25) 折口信夫「春来る鬼—秋田にのこる奇習—」、『折口信夫全集』、第十七卷、一三九頁。
- (26) 折口信夫「春来る鬼」、『折口信夫全集』、第十七卷、一二三—一二六頁。
- (27) 折口信夫「古代生活の研究」(常世の国)、『折口信夫全集』、第二卷、中央公論社、一九六五年、三十三—三十四頁。
- (28) 折口信夫「翁の発生」、『折口信夫全集』、第二卷、四〇〇頁。
- (29) 岡正雄「日本民族文化の形成」、『異人その他』、岩波書店、一九九四年、五頁。
- (30) 岡正雄「日本民族文化の形成」、九頁—十頁。
- (31) 岡正雄「日本民族文化の形成」、十九頁。
- (32) 大林太良「正月の来た道—日本と中国の新春行事—」、小学館、一九九二年、一一〇—一一一頁。
- (33) 廣田律子「鬼の来た道」、玉川大学出版部、一九九七年、十九頁。
- (34) 平辰彦「ナマハゲ系儀礼の来訪する〈鬼〉と〈翁〉のドラマツルギ—男鹿のナマハゲと遊佐のアマハゲの仮面を中心に—」、二十七—二十九頁。
- (35) ジャン・ルイ・ペドウアン(齊藤正二訳)『仮面の民俗学』(文庫クセジュ)、白水社、一九六三年、八頁。
- (36) 平辰彦「世界の〈鬼〉フェスティバルにおける比較研究—男鹿の〈ナマハゲ〉と〈鬼〉の観光アトラクションをめぐって—」、七十四頁参照。
- (37) 平辰彦「世界の〈鬼〉フェスティバルにおける比較研究—男鹿の〈ナマハゲ〉と〈鬼〉の観光アトラクションをめぐって—」、七十七—七十八頁参照。
- (38) 平辰彦「世界の〈鬼〉フェスティバルにおける比較研究—男鹿の〈ナマハゲ〉と〈鬼〉の観光アトラクションをめぐって—」、七十八—七十九頁参照。

主要参考文献

- 秋田文化出版、二〇〇四年。
- 芳賀日出男『ヨーロッパ古層の異人たち―祝祭と信仰』、東京書籍、二〇〇三年。
- 萩原秀三郎『神樹―東アジアの柱立て』、小学館、二〇〇一年。
- 橋本和也『観光人類学の戦略―文化の売り方・売られ方―』、世界思想社、一九九九年。
- バーレン・スミス（三村浩史監訳）『観光・リゾート開発の人類学―ホスト&ゲスト論にみる地域文化の対応』、頸草書房、一九九一年。
- 廣田律子『鬼の来た道』、玉川大学出版部、一九九七年。
- 柳田國男『定本 柳田國男集』、第二卷、筑摩書房、一九六二年。
- 山下晋司『観光人類学』、新曜社、一九九六年。
- 和歌森太郎編『くにさき―西日本民俗・文化における地位―』、吉川弘文館、一九六〇年。
- 石森秀三『博物館学概論―ミュージアムの多様な世界―』、放送大学教育振興会、一九九九年。
- 大林太良『正月の来た道―日本と中国の新春行事―』、小学館、一九九二年。
- 岡正雄『異人その他』、岩波書店、一九九四年。
- 折口信夫『折口信夫全集』、第二卷、中央公論社、一九六五年。
- 折口信夫『折口信夫全集』、第十七卷、中央公論社、一九九六年。
- 香川眞編『観光学大事典』、木楽舎、二〇〇七年。
- 川副武胤・新野直吉校注『神道大系神社編二十八出羽國』、神道大系編纂会、一九九〇年。
- 小松和彦編『怪異の民俗④ 鬼』、河出書房新社、二〇〇〇年。
- ジャン・ルイ・ベドゥアン（斉藤正二訳）『仮面の民俗学』（文庫クセジュ）、白水社、一九六三年。
- ジョン・アーリ（加太宏邦訳）『観光のまなざし』、法政大学出版局、一九九五年。
- 菅江真澄『菅江真澄全集』、第四卷、未来社、一九七三年。
- 日本海域文化研究所『ナマハゲ―その面と習俗―』、



図一 全国の「ナマハゲ系儀礼」の分布図



図三 「漢武帝飛来之図」(赤神神社所蔵)



図二 「舞台嶋」(「武帝嶋」)



図四 「五鬼伝説の石段」



図五 「五社堂」(国重要文化財)

江戸時代における外来植物の認識

村 中 孝 司

要旨

江戸時代における外来植物の実態とその認識を把握するため、当時出版された代表的な本草・植物書を調べ、現在、野生状態で見いだされる外来植物のうち、どのような種が見いだされるかを検討した。花壇地錦抄、増補地錦抄、広益地錦抄、地錦抄附録、大和本草、花彙、物品識名、物品識名拾遺、本草図譜、草木図説のいずれか一つ以上に掲載された種は合計二六〇種であった。リストアップされた植物の用途等を詳しく検討したところ、鑑賞、薬、食用植物の割合が高い傾向が認められた。一方、緑化・砂防、飼料・牧草用の種、雑草は、現在、逸出・野生化が確認されている外来植物の組成と比べて低い割合を示した。江戸時代には、鑑賞、薬、食の用途の需要が高く、これらの用途として用いられた植物は記載に値するほど重要視されていたことが示された。

はじめに

日本では古来より植物が絵画や建築などに描かれ、それらの利用方法とともに和名も広く認識されてきた。深根輔仁『本草和名』⁽¹⁾は我が国最古の本草書とされており、古くから薬草や園芸植物などの植物に対する関心が高かったことが分かる。貝原益軒『大和本草』⁽²⁾は江戸時代の本草学の先覚と言うべき出版物であり、当時の日本人は国内に自生もしくは栽培される植物の種類を初めて図によって知ることができた。小野蘭山・島田充房『花彙』⁽³⁾は当時の代表的な園芸植物を図で表したものである。江戸時代後期には岩崎灌園によって『本草図譜』⁽⁴⁾が出版された。この史料は全九二冊から構成される江戸時代最大規模の植物図譜の一つであり、実物の観察とスケッチによる植物図はすべて彩色図である。さらに、西洋の植物学の影響を強く受けた飯沼慾齋は『草木図説』⁽⁵⁾を刊行した。この史料は残念ながら未完であったが、牧野⁽⁶⁾によって明治末期から大正にかけて『増訂草木図説草部』が出

版され、昭和初期に『牧野日本植物図鑑』⁽⁷⁾が出版されるまでの長い間、重要な植物図鑑の一つとなった。

このように、古くから数多くの本草書や植物図譜・図鑑が刊行されたことから、時代を通して日本人の植物に対する関心の高さや知識の広さをうかがい知ることができる。

これらの史料の中には、日本に本来は自生のない外来植物が数多く掲載されている。江戸時代には鎖国によって海外からの物資の輸入や貿易国は限られていたが、有用性の高い二五〇程度の植物はすでに渡来していたと推定されている⁽⁸⁾。これらの種が史料に現れているということは、著者および民衆がその植物に関心をもち、記録として残すべき重要な対象であったことを示している。あるいは異国への関心が外来植物に注目を集めるきっかけになった可能性もある。それらの外来植物がどの程度知られ、どのような用途として輸入されたのであろうか。本研究では、江戸時代を代表する植物文献である『花壇地錦抄』⁽⁹⁾、『増補地錦抄』⁽¹⁰⁾、『広益地錦抄』⁽¹¹⁾、『地錦抄附録』⁽¹²⁾、『大和本草』⁽²⁾、『花彙』⁽³⁾、『物品識名』⁽¹³⁾、『物品識名拾遺』⁽¹⁴⁾、『本草図譜』⁽⁴⁾、『草木図説』⁽⁵⁾を参照し、外来植物が当時どれだけ認識されていたのか調査するとともに、それらの種類や用途等を検討することを目的とした。

外来植物の定義と範囲

二〇〇五年に施行された外来生物法では、概ね明治元年（一八六八年）以降に日本に渡来したものを外来植物としている。それは開国によって多量の物資が日本に持ち込まれ、この時代を境に数多くの外来植物が渡来したこと、自然科学の輸入もこの時代であったことと、江戸時代以前には植物に関する史料が乏しいことを根拠としている。しかし、この定義では一般的には外来植物と考えられている種は含まれない問題がある。長田⁽¹⁵⁾は概ね江戸時代末期以降に渡来したものを指すのが妥当としている。また、江戸時代においても植物に関する関心は高く、史料は必ずしも乏しいとは言えない。清水⁽¹⁶⁾は、時代をもう少し遡り、一六世紀とするのが適当としている。村中⁽⁸⁾も清水⁽¹⁶⁾の意見に準拠し、二二三七種の外来植物を報告している。この時代を境に数多くの植物が渡来し、また、記録が残されるようになったことが理由である。本稿では、概ね一六世紀以降に渡来したもしくは確認されたことが確かな外来植物で、野外に逸出・野生化している種を外来植物として取り扱うものとした。

方法

江戸時代中に出版された代表的な本草・植物関係の史料を表一に整理した。著者が二〇〇八年までに作成した外来植物リスト⁽⁸⁾に基づき、それらに掲載されている植物のうち、史料に記載のあるものを抽出した。ただし、本研究において活用した史料は、その性質を考慮して次の六史料に整理して取り扱うものとした。

- (ア) 「花壇地錦抄」⁽⁹⁾、「増補地錦抄」⁽¹⁰⁾、「広益地錦抄」⁽¹¹⁾、「地錦抄附録」⁽¹²⁾
- (イ) 「大和本草」⁽²⁾
- (ウ) 「花彙」⁽³⁾
- (ニ) 「物品識名」⁽¹³⁾、「物品識名拾遺」⁽¹⁴⁾
- (オ) 「本草図譜」⁽⁴⁾
- (カ) 「草木図説」⁽⁵⁾

史料に掲載された種の同定については、貝原益軒撰・白井考証『大和本草』⁽¹⁷⁾、飯沼慾齋原著・牧野増訂『増訂草木図説草部』⁽⁶⁾、北村ほか『本草図譜総合解説』⁽¹⁸⁾、小野蘭土・島田充房著・奥山解説『花彙上・下』⁽¹⁹⁾を参照した。なお、未刊である草木図説本部については、飯沼慾齋原著・北村『草木図説本部』⁽²⁰⁾を使用した。これらの史料に掲載されている外国産植物のうち、逸出・野生化が確認されている種を外来植物とし、それ以外の種、つまり、外来植物リストに掲載

載されていない種を対象外とした。用途等については、村中⁽⁸⁾の区分に準じるものとした。

結果

抽出された外来植物を六史料ごとに表二に示した。いずれか一つ以上の史料に掲載された種は合計二六〇種であった。また、花壇地錦抄・増補地錦抄・広益地錦抄・地錦抄附録はあわせて六〇種、花彙は四五種、物品識名・同拾遺はあわせて一二二種、大和本草は八八種、本草図譜が一六五種、草木図説前編(草部)・本部をあわせて一七三種であった(表三)。

用途等について検討したところ、掲載種はいずれの史料においても、鑑賞、薬、食用植物の種の割合に高い傾向が認められた。このうち、ビョウヤナギ *Norysca chinensis* (L.) Spach, ケイトウ *Celosia cristata* L., ケンノウ *Dicentra spectabilis* (L.) Lemaire, ニュウカイドウ *Begonia grandis* Dryand., エゴスグサ *Senna obtusifolia* (L.) H. S. Irwin & Barneby, サニンナ *Cornus officinalis* Sieb. & Zucc., チャンナン *Cedrela sinensis* A. Juss., ホウセンカ *Impatiens balsamina* L. など二六種(一〇・〇%)が五以上の史料に記載されており、これらの多くは鑑賞、薬、食などの用途を有する種であった。一方、緑化・砂防、飼料・牧草用の種の種数はそ

表1. 江戸時代の代表的な植物関係史料の刊行年、著者、史料名

西暦	植物に関する代表的な出版物と著者
1657	狩野重賢『草木写生春秋之巻』（～1699）
1664	水野元勝『花壇綱目』（～1681）
1666	中村楊斎『訓蒙図彙』
1695	伊藤伊兵衛『花壇地錦抄』
1699	伊藤伊兵衛・伊藤政武『草花絵前集』
1709	貝原益軒『大和本草』
1710	伊藤伊兵衛『増補地錦抄』
1716	伊藤伊兵衛『広益地錦抄』（～1719）
1729	植村政勝『諸州採葉記』
1731	毘留舎那谷『東莠南畝識』
1733	伊藤伊兵衛『地錦抄附録』
1735	菊池成胤『草木弄葩抄』
1738	稻生若水・丹羽正伯『庶物類纂』（～1747）
1748	田村藍水『人參耕作記』
1759	小野蘭山・島田充房『花彙』（～1763）
1770	田村藍水『琉球産物志』
1792	小林源之助『蝦夷草木図』
1803	小野蘭山『本草綱目啓蒙』（～1805）
1809	水谷豊文『物品識名』
1822	宇田川榕菴『菩多尼訶経』
1825	水谷豊文『物品識名拾遺』
1828	伊藤圭介『泰西本草名疏』（～1829）
1829	水野忠暁『草木錦葉集』
1829	岩崎灌園『本草図譜』（～1844）
1832	水野忠暁・関根雲停『小おもと名寄』
1834	宇田川榕菴『理学入門 植学啓原』（～1835）
1838	山本亡羊『百品考初編』
1844	小野蘭山・梯南洋『重修本草綱目啓蒙』
1847	小野蘭山・井口望之『重訂本草綱目啓蒙』
1849	井口望之『本草綱目啓蒙図譜』
1853	加藤正得『俳諧季寄 これこれ草』
1854	万花園主人・服部雪斎『朝顔三十六花撰』
1856	飯沼慾齋『草木図説前編』（～1862）

れぞれ八種(三・一%)、一八種(六・九%)と低かった。また、雑草は八二種(三一・五%)であった。

各々の確認年代における史料での掲載種の種数を検討したところ、各々の史料の直前に渡来した植物が多くを占めていた(図一)。ただし、文献の刊行年以降に渡来したことが確認されている種もわずかながら含まれていた。これらの史料に掲載された外来植物のうち、一九八種は江戸時代以前に渡来した種であった。村中⁽⁸⁾によれば江戸時代以前に渡来または確認された外来植物は合計二七三種であり、七二・五%の種が検討したいずれかの史料に掲載されていた。

考察

今回検討した史料から、江戸時代に渡来した外来植物の七〇%以上を抽出することができた。これらの史料が江戸時代の植物に関する知識を集約したものとして妥当であることが示された。

本研究から、当時の外来植物も数多く見いだされることが明らかにされた。また、いずれかの一つ以上の史料に記載された種の六八%が鑑賞、四五%が薬、三七%が食用であり、当時はこれらの用途の種の需要が高く、また、その必要性や一般での認知度の高さから記録に残すに値する植物であったと推測される。江戸

時代には実際に数多くの園芸、農業、食、薬に関する史料が出版されており、その需要の高さを推測することができる。一方、緑化・砂防、飼料・牧草の用途を有する種は比較的少なかった。(ア)そもそも渡来していない、(イ)渡来していても広がっておらず、その植物に対して認識されていない、(ウ)これらの用途への需要が高くない、の三つのいずれかもしくはすべてが原因であると考えられる。その用途を有する種は需要が低く、輸入する程度のもではなかった、あるいは国内産の植物を利用していたものと推測される。現代のように畜産物に食生活を多く依存していた時代ではなく、畜産業に係る飼料・牧草の需要は現代ほど高くなかった。もしくは、在来植物やわずかな外来植物で十分担うことができたのであろう。さらに、道路網等の交通機関も現在ほど発展していなかった時代においては、法面の緑化の必要性も低かった。リストアップされた種の中には、わずかではあるがこれらの用途を持つ種が含まれているのは、国内で飼料・牧草や緑化・砂防材料として用いられたのではなく、他の用途として輸入され、それらの種が飼料・牧草、緑化・砂防材料としての用途を併せ持っていたに過ぎない可能性が高い。

現在の外来植物の用途等の区分からは、四五%の種が雑草としての用途等を有している⁽⁸⁾。しかし、江戸

表2. 江戸時代に刊行された代表的な植物関係史料に掲載されている外来植物
 なお、地錦抄は花壇地錦抄、増補地錦抄、広益地錦抄、地錦抄附録をあわせたもの、物
 品識名は同拾遺をあわせたもの、草木図説は前編(草部)、木部をあわせたものである。

和名	科	学名	地錦抄	花叢	物品識名	大和本草	本草図譜	草木図説
イチョウ	イチョウ科	<i>Ginkgo biloba</i> L.			○	○	○	○
コウヨウザン	スギ科	<i>Cunninghamia lanceolata</i> (Lamb.) Hook.			○			○
センベルセコイア	スギ科	<i>Sequoia sempervirens</i> (D.Don) Endl.						○
コノテガシワ	ヒノキ科	<i>Thuja orientalis</i> L.			○		○	○
ユリノキ	モクレン科	<i>Liriodendron tulipifera</i> L.					○	
ハクモクレン	モクレン科	<i>Magnolia heptapeta</i> (Buchoz) Dandy	○	○		○	○	○
モクレン	モクレン科	<i>Magnolia quinquepeta</i> (Buchoz) Dandy	○			○	○	○
ロウバイ	ロウバイ科	<i>Chimonanthus praecox</i> (L.) Link		○	○		○	○
ニッケイ	クスノキ科	<i>Cinnamomum loureirii</i> Nees	○	○	○		○	○
ゲツケイジュ	クスノキ科	<i>Laurus nobilis</i> L.					○	
テンダイウヤク	クスノキ科	<i>Lindera strychnifolia</i> (Sieb. & Zucc.) F.Vill.		○				○
チャラン	センリョウ科	<i>Chloranthus spicatus</i> (Thunb.) Makino			○			○
ヒイラギナンテン	メギ科	<i>Mahonia japonica</i> (Thunb.) DC.	○					
シユウメイギク	キンボウゲ科	<i>Anemone hupehensis</i> Lemoine var. <i>japonica</i> Bowles & Stearn		○	○	○		○
セイヨウオダマキ	キンボウゲ科	<i>Aquilegia vulgaris</i> L.						
テッセン	キンボウゲ科	<i>Clematis florida</i> Thunb.	○		○	○		
ヒナゲシ	ケシ科	<i>Papaver rhoeas</i> L.			○	○	○	
ケシ	ケシ科	<i>Papaver somniferum</i> L.			○	○	○	○
ケマンソウ	ケマンソウ科	<i>Dicentra spectabilis</i> (L.) Lemaire	○	○	○	○	○	
フウ	マンサク科	<i>Liquidambar formosana</i> Hance			○	○	○	○
アサ	アサ科	<i>Cannabis sativa</i> L.			○	○	○	○
イチジク	クワ科	<i>Ficus carica</i> L.	○	○	○	○	○	○
テウチルミ	クルミ科	<i>Juglans regia</i> L. var. <i>orientalis</i> (Dode) Kitam.					○	
ヤマゴボウ	ヤマゴボウ科	<i>Phytolacca acinosa</i> Roxb.			○	○	○	○
アメリカヤマゴボウ	ヤマゴボウ科	<i>Phytolacca americana</i> L.						○
オシロイバナ	オシロイバナ科	<i>Mirabilis jalapa</i> L. var. <i>jalapa</i>	○	○	○	○	○	○
ウチワサボテン	サボテン科	<i>Opuntia ficus-indica</i> Mill.			○	○	○	○
ツルムラサキ	ツルムラサキ科	<i>Basella alba</i> L.			○	○	○	○
シンツルムラサキ	ツルムラサキ科	<i>Basella rubra</i> L.						
ヒモゲイトウ	ヒユ科	<i>Amaranthus caudatus</i> L.					○	○
スズモリゲイトウ	ヒユ科	<i>Amaranthus cruentus</i> L.					○	○
イヌビユ	ヒユ科	<i>Amaranthus lividus</i> L.			○		○	○
ハゲイトウ	ヒユ科	<i>Amaranthus tricolor</i> L. subsp. <i>tricolor</i>	○			○	○	○
ノゲイトウ	ヒユ科	<i>Celosia argentea</i> L. var. <i>argentea</i>	○		○	○	○	○
ケイトウ	ヒユ科	<i>Celosia cristata</i> L. var. <i>cristata</i>	○		○	○	○	○
センニチコウ	ヒユ科	<i>Gomphrena globosa</i> L.	○		○	○		
アカザ	アカザ科	<i>Chenopodium album</i> L. var. <i>centrorubrum</i> Makino			○		○	○
アリタソウ	アカザ科	<i>Chenopodium ambrosioides</i> L. var. <i>ambrosioides</i>			○	○	○	
ウラジロアカザ	アカザ科	<i>Chenopodium glaucum</i> L.					○	
ホウキギ	アカザ科	<i>Kochia scoparia</i> (L.) Schrad. var. <i>scoparia</i>				○	○	○
ムギセンノウ	ナデシコ科	<i>Agrostemma githago</i> L.					○	
セキチク	ナデシコ科	<i>Dianthus chinensis</i> L.	○		○	○	○	
マンテマ	ナデシコ科	<i>Silene gallica</i> L. var. <i>quinquevulnera</i> (L.) W.D.J.Koch						○
ドウカンソウ	ナデシコ科	<i>Vaccaria hispanica</i> (Mill.) Rauschert		○	○		○	
オオケタデ	タデ科	<i>Persicaria orientalis</i> (L.) Spach			○	○	○	○
ニオイタデ	タデ科	<i>Persicaria viscosa</i> (Hamilt.) H.Gross						
ツルドタミ	タデ科	<i>Pleuropterus multiflorus</i> (Thunb.) Turcz.						
カラダイオウ	タデ科	<i>Rheum rhubarbarum</i> L.					○	○
ヒメスイバ	タデ科	<i>Rumex acetosella</i> L.					○	○
ヌマダイオウ	タデ科	<i>Rumex aquaticus</i> L.					○	○
ビヨウヤナギ	オトギリソウ科	<i>Norysca chinensis</i> (L.) Spach	○	○	○	○	○	○
キンシバイ	オトギリソウ科	<i>Norysca patula</i> (Thunb.) Voigt					○	○
ツナソ	シナノキ科	<i>Corchorus capsularis</i> L.				○	○	○
アオギリ	アオギリ科	<i>Firmiana simplex</i> (L.) W.Wight var. <i>tomentosa</i> (Thunb.) Kurata		○				
ゴジカ	アオギリ科	<i>Pentapetes phoenicea</i> L.	○	○	○	○		
トロロアオイ	アオイ科	<i>Abelmoschus manihot</i> (L.) Medik.			○	○	○	○
リュウキュウトロロアオイ	アオイ科	<i>Abelmoschus moschatus</i> Medik.					○	○
イチビ	アオイ科	<i>Abutilon theophrasti</i> Medik.			○		○	○
タチアオイ	アオイ科	<i>Alcea rosea</i> L.	○			○	○	○
フヨウ	アオイ科	<i>Hibiscus mutabilis</i> L. var. <i>mutabilis</i>	○			○	○	○
ムクゲ	アオイ科	<i>Hibiscus syriacus</i> L.	○		○	○	○	○
ギンセンカ	アオイ科	<i>Hibiscus trionum</i> L.	○		○		○	○

江戸時代における外来植物の認識

表2. つづき

和名	科	学名	地錦抄	花衆	物品 識名	大和 本草	本草 図譜	草圖 説
ハイアオイ	アオイ科	<i>Malva rotundifolia</i> L.						○
ゼニアオイ	アオイ科	<i>Malva sylvestris</i> L. var. <i>mauritiana</i> Mill.			○	○	○	○
オカノリ	アオイ科	<i>Malva verticillata</i> L. var. <i>crispa</i> Mak.			○		○	○
フユアオイ	アオイ科	<i>Malva verticillata</i> L. var. <i>verticillata</i>	○		○	○	○	○
ボンセンカ	アオイ科	<i>Urena lobata</i> L. subsp. <i>sinuata</i> (L.) Borss.			○		○	○
ニホンカボチャ	ウリ科	<i>Cucurbita moschata</i> Duch.			○	○	○	
ニガウリ	ウリ科	<i>Momordica charantia</i> L. var. <i>pavel</i> Crantz	○		○	○	○	
ギョリュウ	ギョリュウ科	<i>Tamarix chinensis</i> Lour.		○	○		○	
トケイソウ	トケイソウ科	<i>Passiflora caerulea</i> L.	○		○			○
シュウカイドウ	シュウカイドウ科	<i>Begonia grandis</i> Dryand.	○	○	○	○		
サンシキスミレ	スミレ科	<i>Viola tricolor</i> L.					○	
コリヤナギ	ヤナギ科	<i>Salix koriyanagi</i> Kimura ex Görz			○			○
タカナ	アブラナ科	<i>Brassica juncea</i> (L.) Czern. var. <i>integrifolia</i> Sinskaja			○		○	
カラシナ	アブラナ科	<i>Brassica juncea</i> (L.) Czern. var. <i>juncea</i>			○		○	
ハボタン	アブラナ科	<i>Brassica oleracea</i> L. var. <i>acephala</i> DC.					○	
クジャラサ	アブラナ科	<i>Descurainia sophia</i> (L.) Webb			○		○	
コショウソウ	アブラナ科	<i>Lepidium sativum</i> L.					○	○
アラセイトウ	アブラナ科	<i>Matthiola incana</i> R.Br.	○		○	○		
オオアラセイトウ	アブラナ科	<i>Orychophragmus violaceus</i> O.E.Schulz var. <i>violaceus</i>	○					
グンバイナズナ	アブラナ科	<i>Thlaspi arvense</i> L.			○		○	○
フウチョウソウ	フウチョウソウ科	<i>Gynandropsis gynandra</i> (L.) Briq.					○	
リュウキユウコクタン	カキノキ科	<i>Diospyros egbert-walkeri</i> Kosterm.					○	
マメガキ	カキノキ科	<i>Diospyros lotus</i> L.					○	
フサスグリ	スグリ科	<i>Ribes rubrum</i> L.					○	
オノマンネングサ	ベンケイソウ科	<i>Sedum lineare</i> Thunb.				○		
オランダイチゴ	バラ科	<i>Fragaria</i> × <i>ananassa</i> Duchesne						○
エゾヘビイチゴ	バラ科	<i>Fragaria vesca</i> L.						○
ハナカイドウ	バラ科	<i>Malus halliana</i> Koehne			○		○	○
ユスラウメ	バラ科	<i>Prunus tomentosa</i> Thunb.		○				
ナニワイバラ	バラ科	<i>Rosa laevigata</i> Michx.			○		○	
トックリイチゴ	バラ科	<i>Rubus coreanus</i> Miq.					○	
トキンイバラ	バラ科	<i>Rubus tokinibara</i> Naruh.					○	
オランダワレモコウ	バラ科	<i>Sanguisorba minor</i> Scop.						○
コデマリ	バラ科	<i>Spiraea cantoniensis</i> Lour.	○		○	○		
シジミバナ	バラ科	<i>Spiraea prunifolia</i> Sieb. & Zucc.	○	○				
ギンゴウカン	ネムノキ科	<i>Acacia farnesiana</i> (L.) Willd.						
ギンネム	ネムノキ科	<i>Leucaena leucocephala</i> (Lam.) de Wit						○
オジギソウ	ネムノキ科	<i>Mimosa pudica</i> L.						○
ハナズオウ	ジャケツイバラ科	<i>Cercis chinensis</i> Bunge			○	○	○	
エビスグサ	ジャケツイバラ科	<i>Senna obtusifolia</i> (L.) H. S. Irwin & Barneby	○		○	○	○	
オオハセンナ	ジャケツイバラ科	<i>Senna sophora</i> (L.) Roxb.						○
ハブソウ	ジャケツイバラ科	<i>Senna torosa</i> Cav.			○		○	
トウアズキ	マメ科	<i>Abrus precatorius</i> L.					○	
ナンキンマメ	マメ科	<i>Arachis hypogaea</i> L. subsp. <i>hypogaea</i>	○		○	○		○
ゲンゲ	マメ科	<i>Astragalus sinicus</i> L.	○	○		○		
ムレスズメ	マメ科	<i>Caragana sinica</i> (Buc'hoz) Rehder			○			○
キバナハギ	マメ科	<i>Crotalaria pallida</i> Aiton var. <i>pallida</i>						○
オランダビユ	マメ科	<i>Cullen corylifolia</i> (L.) Medikus		○	○			
エニシダ	マメ科	<i>Cytisus scoparius</i> (L.) Link	○		○			○
フジマメ	マメ科	<i>Lablab purpureus</i> (L.) Sweet					○	
キバナノレンリソウ	マメ科	<i>Lathyrus pratensis</i> L.						○
コメツクシマゴヤシ	マメ科	<i>Medicago lupulina</i> L. var. <i>lupulina</i>					○	
ウマゴヤシ	マメ科	<i>Medicago polymorpha</i> L. var. <i>polymorpha</i>				○		○
シナガワハギ	マメ科	<i>Melilotus officinalis</i> (L.) Pall. subsp. <i>suaveolens</i> (Ledeb.) H. Ohashi						○
ライマメ	マメ科	<i>Phaseolus lunatus</i> L.					○	
エンジュ	マメ科	<i>Sophora japonica</i> L.	○	○	○	○	○	○
シロツメクサ	マメ科	<i>Trifolium repens</i> L. var. <i>repens</i>						○
ソラマメ	マメ科	<i>Vicia faba</i> L.				○	○	○
ヤエナリ	マメ科	<i>Vigna radiata</i> (L.) R. Wilczk			○		○	○
サルスベリ	ミソハギ科	<i>Lagerstroemia indica</i> L.				○		
ジンチョウゲ	ジンチョウゲ科	<i>Daphne odora</i> Thunb.	○		○		○	
ミツマタ	ジンチョウゲ科	<i>Edgeworthia chrysantha</i> Lindl.	○	○				
マツヨイグサ	アカバナ科	<i>Oenothera stricta</i> Ledeb. ex Link						
ツキミソウ	アカバナ科	<i>Oenothera tetraaptera</i> Cav.						
シクンシ	シクンシ科	<i>Quisqualis indica</i> L.		○	○		○	
パンジロウ	フトモモ科	<i>Psidium guajava</i> L.						○
フトモモ	フトモモ科	<i>Syzygium jambos</i> Alston						○

表2. つづき

和名	科	学名	地錦抄	花衆	物品 識名	大和 本草	本草 図説	草 図説
サンシュユ	ミズキ科	<i>Cornus officinalis</i> Sieb. & Zucc.		○	○	○	○	
コニシキソウ	トウダイグサ科	<i>Chamaesyce maculata</i> (L.) Small						○
ハズ	トウダイグサ科	<i>Croton tiglium</i> L.	○		○		○	
ホルトソウ	トウダイグサ科	<i>Euphorbia lathyris</i> L.						○
キリンカク	トウダイグサ科	<i>Euphorbia neriiifolia</i> L.			○		○	
トウゴマ	トウダイグサ科	<i>Ricinus communis</i> L.				○	○	
ナンキンハゼ	トウダイグサ科	<i>Sapium sebiferum</i> (L.) Roxb.			○	○	○	
ナツメ	クロウメモドキ科	<i>Zizyphus jujuba</i> Mill. var. <i>inermis</i> (Bunge) Rehder			○	○	○	
アマ	アマ科	<i>Linum usitatissimum</i> L.			○			
モクゲンジ	ムクロジ科	<i>Koelreuteria paniculata</i> Laxm.	○	○	○		○	
トウカエデ	カエデ科	<i>Acer buergerianum</i> Miq.		○	○			
チャンテン	センダン科	<i>Cedrela sinensis</i> A.Juss.	○	○		○	○	○
ザダイダイ	ミカン科	<i>Citrus aurantium</i> L. var. <i>cyathifera</i> Y.Tanaka					○	○
ゴシュユ	ミカン科	<i>Evodia rutecarpa</i> (A.Juss.) Benth.				○	○	○
マルキンカン	ミカン科	<i>Fortunella japonica</i> Swingle	○		○		○	
ナガキンカン	ミカン科	<i>Fortunella margarita</i> Swingle	○		○		○	
ハナカタバミ	カタバミ科	<i>Oxalis bowieana</i> Lodd.			○		○	
オランダフウロ	フウロソウ科	<i>Erodium cicutarium</i> (L.) L'Hér. var. <i>cuticularium</i>					○	
ホウセンカ	ツリフネソウ科	<i>Impatiens balsamina</i> L.	○		○	○	○	
ヒメウコギ	ウコギ科	<i>Acanthopanax sieboldianum</i> Makino				○		
カミヤツデ	ウコギ科	<i>Tetrapanax papyriferus</i> (Hook.) K. Koch					○	
イノンド	セリ科	<i>Anethum graveolens</i> L.	○			○	○	
オランダミツバ	セリ科	<i>Apium graveolens</i> L.					○	
コエンドロ	セリ科	<i>Coriandrum sativum</i> L.				○	○	○
ニンジン	セリ科	<i>Daucus carota</i> L. subsp. <i>sativus</i> (Hoffm.) Arcang.	○					
オランダゼリ	セリ科	<i>Petroselinum hortense</i> Hoffm.	○		○			
ニチチソウ	キョウチクトウ科	<i>Catharanthus roseus</i> (L.) G.Don						○
キョウチクトウ	キョウチクトウ科	<i>Nerium oleander</i> L. var. <i>indicum</i> (Mill.) O. Deg. & Greenwell		○	○			
トウワタ	ガガイモ科	<i>Asclepias curassavica</i> L.					○	○
トウガラシ	ナス科	<i>Capsicum annuum</i> L.			○	○		
チョウセンアサガオ	ナス科	<i>Datura metel</i> L.				○	○	
トマト	ナス科	<i>Lycopersicon esculentum</i> Mill. var. <i>esculentum</i>					○	
オオセンナリ	ナス科	<i>Nicandra physalodes</i> (L.) Gaertn.						○
タバコ	ナス科	<i>Nicotiana tabacum</i> L.						○
ホオズキ	ナス科	<i>Physalis alkekengi</i> L. var. <i>franchetii</i> (Mast.) Makino			○	○	○	
ヒロハフウリンホオズキ	ナス科	<i>Physalis angulata</i> L. var. <i>angulata</i>						
ヒメセンナリホオズキ	ナス科	<i>Physalis pubescens</i> L. var. <i>pubescens</i>			○			
ジャガイモ	ナス科	<i>Solanum tuberosum</i> L.			○			
ヒルアサガオ	ヒルガオ科	<i>Calonyction muricatum</i> (L.) G.Don		○	○		○	
マルバルコウ	ヒルガオ科	<i>Quamoclit coccinea</i> (L.) Moench						○
ルコウソウ	ヒルガオ科	<i>Quamoclit pennata</i> (L.) Bojer	○	○	○			
トウギリ	クマツヅラ科	<i>Clerodendrum japonicum</i> (Thunb.) Sweet		○		○	○	
ニンジンボク	クマツヅラ科	<i>Vitex cannabifolia</i> Sieb. & Zucc.		○	○			
オランダハッカ	シソ科	<i>Mentha spicata</i> L. var. <i>crispa</i> Benth.						○
エゴマ	シソ科	<i>Perilla frutescens</i> (L.) Britton var. <i>frutescens</i>				○	○	
コガネバナ	シソ科	<i>Scutellaria baicalensis</i> Georgi		○				○
チョロギ	シソ科	<i>Stachys sieboldii</i> Miq.					○	
レンギョウ	モクセイ科	<i>Forsythia suspensa</i> (Thunb.) Vahl.		○	○	○	○	
ヒイラギモクセイ	モクセイ科	<i>Osmanthus × fortunei</i> Carriere						
キンモクセイ	モクセイ科	<i>Osmanthus fragrans</i> (Thunb.) Lour. var. <i>aurantiacus</i> Makino	○	○	○	○		
ギンモクセイ	モクセイ科	<i>Osmanthus fragrans</i> (Thunb.) Lour. var. <i>fragrans</i>	○	○	○		○	
ツリガネカズラ	ノウゼンカズラ科	<i>Bignonia capreolata</i> L.						
ノウゼンカズラ	ノウゼンカズラ科	<i>Campsis grandiflora</i> (Thunb.) Loisel.		○				○
キササゲ	ノウゼンカズラ科	<i>Catalpa ovata</i> G.Don		○	○	○	○	
イセハナビ	キツネノマゴ科	<i>Championella japonica</i> (Thunb.) Bremek.			○			
サンゴバナ	キツネノマゴ科	<i>Cyrtanthera carnea</i> (Lindl.) Bremek.						○
オオカワヂシャ	ゴマノハグサ科	<i>Veronica anagallis-aquatica</i> L.						○
タチイヌノフグリ	ゴマノハグサ科	<i>Veronica arvensis</i> L.						○
トウシャジン	キキョウ科	<i>Adenophora stricta</i> Miq.						
モモバギキョウ	キキョウ科	<i>Campanula persicifolia</i> L.						
ルリチョウソウ	キキョウ科	<i>Lobelia erinus</i> L.	○					
サンタンカ	アカネ科	<i>Ixora chinensis</i> Lam.		○			○	
ハクチョウゲ	アカネ科	<i>Serissa japonica</i> (Thunb.) Thunb.		○		○		
ハイイロモギ	クク科	<i>Artemisia sieversiana</i> Willd.					○	
コバノセンダングサ	クク科	<i>Bidens bipinnata</i> L.					○	
ホソバノセンダングサ	クク科	<i>Bidens parviflora</i> Willd.						○
シロバナノセンダングサ	クク科	<i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>minor</i> (Blume) Sherff						○

江戸時代における外来植物の認識

表2. つづき

和名	科	学名	地錦抄	花衆	物品 識名	大和 本草	本草 図譜	草花 図説
ヒメキンセンカ	キク科	<i>Calendula arvensis</i> L.	○		○	○	○	
トウキンセンカ	キク科	<i>Calendula officinalis</i> L.			○			○
セイヨウベニバナ	キク科	<i>Carthamus tinctorius</i> L. var. <i>spinosus</i> Kitam.		○			○	
シュンギク	キク科	<i>Chrysanthemum coronarium</i> L.			○	○		○
キクニガナ	キク科	<i>Cichorium intybus</i> L.					○	○
ハルシヤギク	キク科	<i>Coreopsis tinctoria</i> Nutt.						○
チョウセンアザミ	キク科	<i>Cynara scolymus</i> L.			○		○	
ベニニガナ	キク科	<i>Emilia sagittata</i> DC.						○
スイゼンジナ	キク科	<i>Gynura bicolor</i> (Roxb. ex Willd.) DC.			○			
サンシチソウ	キク科	<i>Gynura japonica</i> (L.f.) Juel	○		○			○
ヒマワリ	キク科	<i>Helianthus annuus</i> L. var. <i>annuus</i>	○	○		○		○
オオグルマ	キク科	<i>Inula helenium</i> L.		○	○	○	○	○
チシヤ	キク科	<i>Lactuca sativa</i> L.			○		○	○
オランダセンニチ	キク科	<i>Spilanthes acumellata</i> (L.) Murr.						○
センジュギク	キク科	<i>Tagetes erecta</i> L.				○		○
コウオウソウ	キク科	<i>Tagetes patula</i> L.	○					○
バラモンジン	キク科	<i>Tragopogon porrifolius</i> L.						○
ココヤシ	ヤシ科	<i>Cocos nucifera</i> L.						○
シュロチク	ヤシ科	<i>Rhapis humilis</i> Blume	○		○	○		○
トウジュロ	ヤシ科	<i>Trachycarpus wagnerianus</i> Becc.						
ミズイモ	サトイモ科	<i>Colocasia esculenta</i> Schott var. <i>aquatilis</i> (Hassk.) Kitam. ex Hotta						
オランダカイウ	サトイモ科	<i>Zantedeschia aethiopica</i> Spreng.						○
ムラサキオモト	ツユクサ科	<i>Rhoeo spathacea</i> Stearn			○			○
トウワウルモドキ	トウワウルモドキ科	<i>Flagellaria indica</i> L.						○
オニユズダマ	イネ科	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>maxima</i> Makino						
ハトムギ	イネ科	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>mayuen</i> (Roman) Stapf				○		
サトウキビ	イネ科	<i>Saccharum officinarum</i> L.		○	○			
モロコシ	イネ科	<i>Sorghum bicolor</i> (L.) Moench.						
トウモロコシ	イネ科	<i>Zea mays</i> L.			○			
ホウオウチク	タケ科	<i>Bambusa multiplex</i> (Lour.) Raeusch. var. <i>elegans</i> (Koidz.) Muroi	○		○			
ホウライチク	タケ科	<i>Bambusa multiplex</i> (Lour.) Raeusch. var. <i>multiplex</i>						○
ダイサンチク	タケ科	<i>Bambusa vulgaris</i> Schrad. Ex. Wendl.						○
グテイチク	タケ科	<i>Phyllostachys aurea</i> Carr. ex. A.Riv. & C.Riv.	○		○	○		
クロチク	タケ科	<i>Phyllostachys nigra</i> (Lodd.) Munro var. <i>nigra</i>			○	○		
ハチク	タケ科	<i>Phyllostachys nigra</i> (Loddiges) Munro var. <i>henonis</i> (Bean) Stapf.	○					
モウソウチク	タケ科	<i>Phyllostachys pubescens</i> Mazel ex J.Houz.			○			
カンザンチク	タケ科	<i>Pleioblastus hindsii</i> (Munro) Nakai						○
トウチク	タケ科	<i>Sinobambusa tootsik</i> (Seib.) Makino				○		
シホウチク	タケ科	<i>Tetragonocalamus angulatus</i> (Munro) Nakai						
シチトウイ	カヤツリグサ科	<i>Cyperus monophyllus</i> Vahl						○
アンペラソウ	カヤツリグサ科	<i>Lepironia articulata</i> Domin.			○			
リョウリバナナ	バショウ科	<i>Musa × paradisiaca</i> L.						○
バナナ	バショウ科	<i>Musa × sapientum</i> L.						○
イトバショウ	バショウ科	<i>Musa balbisiana</i> Colla						○
バショウ	バショウ科	<i>Musa basjoo</i> Sieb.				○		○
ヒメバショウ	バショウ科	<i>Musa coccinea</i> Andr.	○	○	○	○		○
ムラサキガジュツ	ショウガ科	<i>Curcuma aertuginosa</i> Roxb.						○
キョウオウ	ショウガ科	<i>Curcuma aromatica</i> Salisb.						○
ダンドク	カンナ科	<i>Canna indica</i> L. var. <i>rubra</i> Aiton	○	○	○	○		○
ナツスイセン	ヒガンバナ科	<i>Lycoris squamigera</i> Maxim.			○			
ニホンズイセン	ヒガンバナ科	<i>Narcissus tazetta</i> L. var. <i>chinensis</i> Roemer	○		○	○		
サフランモドキ	ヒガンバナ科	<i>Zephyranthes grandiflora</i> Lindl.						○
オオニラ	ユリ科	<i>Allium tuberosum</i> Rottler var. <i>latifolium</i> Kitam.						○
オランダキジカクシ	ユリ科	<i>Asparagus officinalis</i> L.						○
ハラシ	ユリ科	<i>Aspidistra elatior</i> Blume			○	○		
バイモ	ユリ科	<i>Fritillaria verticillata</i> Willd. var. <i>thunbergii</i> (Miq.) Baker	○	○		○		
テッポウユリ	ユリ科	<i>Lilium longiflorum</i> Thunb.						○
チューリップ	ユリ科	<i>Tulipa</i> spp.						○
サフラン	アヤメ科	<i>Crocus sativus</i> L.						○
ドイツアヤメ	アヤメ科	<i>Iris germanica</i> L.						○
イチハツ	アヤメ科	<i>Iris tectorum</i> Maxim.						
アオノリュウゼツラン	リュウゼツラン科	<i>Agave americana</i> L.			○	○		○
ナガイモ	ヤマノイモ科	<i>Dioscorea batatas</i> Decne.			○			○
カシュウイモ	ヤマノイモ科	<i>Dioscorea bulbifera</i> L. form. <i>domestica</i> Makino & Nemoto			○			○

表3. 江戸時代の植物関係史料に掲載された外来植物の用途等⁽⁸⁾の内訳
 数値は種数、() の数値は各々の史料に掲載された外来植物の種数に対するその用途等における種の種数の割合を示す。対照として全外来植物における内訳⁽⁸⁾を記した。

用途等	史料の合 計	地錦抄	花彙	物品識名	大和本草	本草図譜	草木図説	全リスト
観賞	177 (68.08)	50 (83.33)	39 (86.67)	87 (71.31)	63 (71.59)	103 (62.42)	117 (67.63)	876 (38.88)
薬	117 (45.00)	22 (36.67)	23 (51.11)	67 (54.92)	49 (55.68)	75 (45.45)	90 (52.02)	373 (16.56)
食	96 (36.92)	17 (28.33)	9 (20.00)	42 (34.43)	32 (36.36)	73 (44.24)	54 (31.21)	306 (13.58)
木材繊維	52 (20.00)	9 (15.00)	7 (15.56)	20 (16.39)	16 (18.18)	41 (24.85)	30 (17.34)	144 (6.39)
飼料牧草	18 (6.92)	1 (1.67)	1 (2.22)	4 (3.28)	4 (4.55)	9 (5.45)	14 (8.09)	224 (9.94)
緑化砂防	8 (3.08)	1 (1.67)	1 (2.22)	1 (0.82)	1 (1.14)	4 (2.42)	4 (2.31)	125 (5.55)
雑草	82 (31.54)	13 (21.67)	8 (17.78)	33 (27.05)	27 (30.68)	48 (29.09)	64 (36.99)	1024 (45.45)
合計	260	60	45	122	88	165	173	2253

全リストの種数は、村中⁽⁸⁾に一部の追加修正を加えて作成した。

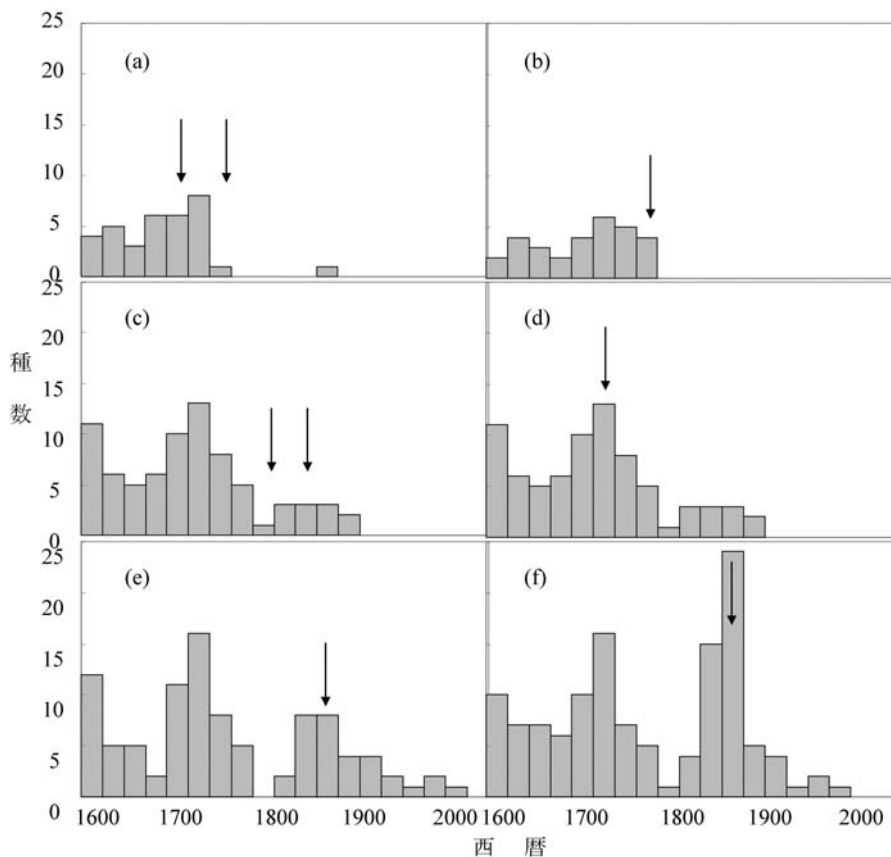


図1. 各々の資料に記載された外来植物の各々の渡来(確認)年代における種数 (a)花壇地錦抄・増補地錦抄・広益地錦抄・地錦抄附録、(b)花彙、(c)物品識名・同拾遺、(d)大和本草、(e)本草図譜、(f)草木図説前編(草部)・同木部。矢印は各々の史料の刊行年を示す。ただし、(a)については、(左)花壇地錦抄、(右)地錦抄附録、(c)については(左)物品識名、(右)同拾遺を示す。

時代に渡来した植物についてはその割合は三二%と比較的低かった。江戸時代には、雑草に対する認識がどの程度であったかについては、さらなる史料研究が必要であるが、少なくとも本研究において検討した史料に有用性の低い雑草も数多く掲載されていることから考えると、認識されていなかったとは考えにくい。したがって、物資、並びに外来植物の侵入圧が現代とは比べものにならないほど小さな江戸時代においては、外来植物としての雑草そのものが渡来していない、もしくは渡来してもその種子の量が現代と比較すると著しく少なく、定着に至らなかったものと考えられる。江戸時代以前に渡来した植物の中に、八二種の雑草が含まれているが、元来は薬、鑑賞用として輸入されたものが現在では雑草となっている種も多く含まれていることには留意する必要がある。

まとめ

現在、逸出・野生化して野生状態で見いだされる外来植物の中には、江戸時代に渡来したものが含まれている。しかし、現代に見るような夥しい量の雑草が侵入するような社会ではなく、現代と比べると、ごくわずかの種の有用植物が持ち込まれていたにすぎない。それらの種は記録に値する重要なものであったのだら

う。逆に雑草など有用性の低い種や侵略性の高い種の定着はほとんどなかった。逸出・野生化が確認されていない栽培植物、現在ではほとんど見ることでない外来植物についても検討をすすめ、江戸時代の渡来植物の実態を明らかにするとともに、現代の外来植物の侵入被害に関する問題を解決に導くための知見とすることが必要である。

註

- (1) 深根輔仁(九一八?) 本草和名
- (2) 貝原益軒(一七〇九) 大和本草
- (3) 小野蘭山・島田充房(一七五九―六三) 花彙
- (4) 岩崎灌園(一八二九―四四) 本草図譜
- (5) 飯沼慾齋(一八五六―六二) 草木図説前編
- (6) 飯沼慾齋原著・牧野富太郎増訂(一九〇七―一一) 増訂草木図説草部、三浦源助、岐阜
- (7) 牧野富太郎(一九四〇) 牧野日本植物図鑑、北隆館、東京
- (8) 村中孝司(二〇〇八) 外来植物の侵入年代・原産地とその用途との関連性、保全生態学研究一三、八九―一〇一
- (9) 伊藤伊兵衛(二六九五) 花壇地錦抄
- (10) 伊藤伊兵衛(二七一〇) 増補地錦抄
- (11) 伊藤伊兵衛(二七一六―一九) 広益地錦抄
- (12) 伊藤伊兵衛(二七三三) 地錦抄附録

- (13) 水谷豊文（一八八九）物品識名
- (14) 水谷豊文（一八八九）物品識名拾遺
- (15) 長田武正（一九七六）原色日本帰化植物図鑑、保育社、大阪
- (16) 清水建美編（二〇〇三）日本の帰化植物、平凡社、東京
- (17) 貝原益軒撰・白井光太郎考証（一九三―三六）大和本草（復刻）、春陽堂、東京
- (18) 北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫（一九八六―九一）本草図譜総合解説、同朋舎、東京
- (19) 小野蘭山・島田充房著・奥山春季解説（一九七七）花彙上・下、八坂書房、東京
- (20) 飯沼慾齋原著・北村四郎編註（一九七七）草木図説木部上・下、保育社、大阪

奥州合戦の戦後処理について

渡 邊 俊

はじめに

文治五年（一一八九）、奥羽の覇者として隆盛を誇った平泉藤原氏も滅亡の時をむかえた。西海の平家を滅亡させ、さらに西方の鬼界島までも平定した源頼朝は、振り上げた自らの刀を鞘におさめることはなかった。返す刀は、宿敵である北方の平泉藤原氏へとむけられたのである。

平泉藤原氏の討滅を決意した頼朝は、朝廷から藤原泰衡追討宣旨を得ないまま文治五年七月十九日、総勢一千騎をひきいて鎌倉を出発、一路、奥州へとむかった。泰衡は、阿津賀志山（現在の福島県伊達郡国見町）に城壁と要害をかまえ、これを迎え撃つ。八月八日、ついに合戦の幕は切って落とされる。世にいう奥州合戦である。

結果は頼朝軍の圧勝であった。北陸道を北上していた比企能員・宇佐美実政を将とする一方の頼朝軍に出羽も突破され、あとがなくなった泰衡は北へ北へと敗走を続けた。そして夷狄嶋（現在の北海道）へとむか

う途中、肥内郡贄柵（現在の秋田県大館市）の河田次郎のもとに立ち寄る。はからずも泰衡にとって、ここが終焉の地となってしまった。

数代の郎従河田次郎を相恃み、肥内郡贄柵に到るの処、河田忽ち年来の旧好を変じ、郎従等をして泰衡を相圍ましめ梟首す。

『吾妻鏡』文治五年九月三日条。原漢文、以下同じ）

ここに平泉藤原氏は滅亡した。

その後、頼朝の関心は、奥羽両国の統治と投降した平泉藤原氏一族の処分とに絞られていく。小論は、先学の成果に学びつつ、①出羽国への対応、②降人の処分、の二点に焦点を定めて奥州合戦の戦後処理についての素描をこころみるものである⁽¹⁾。

一 出羽国への対応

戦乱によって疲弊した奥羽両国の復旧と人心の掌握は、今後の統治をうらなう上で重要な政策課題とな

る。

此間、両国騒動に依り庶民冤屈に及ぶ。或は子孫を失ひ、或は夫婦に別れ、残る所は又、山林に交り空しく雲稼を抛うつ。仍つて之を召し聚められ、本所を安堵すべきの旨、仰せ含めらる。しかのみならず宿老の輩に於ては面々に綿衣一領、龍蹄一疋を賜はる。

（『吾妻鏡』文治五年九月十三日条）

まずは今回の戦乱によつて居住を失い、離散してしまつた人々を集めて、従来通りの生活の場を保障する旨を約束した。さらに「宿老」に対しては衣類と馬を下賜したのである。そして九月二十日、「吉書始」の儀がとりおこなわれる。ここに頼朝による奥羽の統治が宣言された（『吾妻鏡』同日条）。

頼朝による統治政策の基本路線は、「古風」すなわち従来通りのルールを踏襲することにある。『吾妻鏡』文治五年十月二十四日条は次のように記している。

出羽国の地検を遂ぐべきの由、留守所に仰せ置かる。御進発の後、地頭等愁ひ申して云ふ、地検の間、門田を頼ずべきの旨、留守張行するの由と云々。仍つて今日、件の事を停止すべきの趣、御書を遣はさるる所なり。

当国検注の間、所々の地頭の門田を倒さるべきの由の事、尤も驚き聞食す。出羽陸奥に於ては、

夷の地たるに依り、度々の新制にも除かれ訖ぬ。偏に古風を守り、更に新儀無し。然らば件の門田等、何ぞ停廢せられんや。限り有る公田の外、門田は年来の如くにて相違有るべからざるの旨、鎌倉殿の仰せに依り執達件の如し。

十月二十四日 前因幡守

出羽留守所

出羽国留守所による土地の検査にあたり、経営地である門田が没収されるのではないかと地頭等から不安の声があがった。そのため頼朝は、地頭等の門田を従来通り安堵するように出羽留守所に命じたのである。「出羽陸奥に於ては、夷の地たるに依り、度々の新制にも除かれ訖ぬ。偏に古風を守り、更に新儀無し」とあるように、蝦夷の地のやり方にしたがうというのである。つまり先例重視である。陸奥の多賀国府にも、「国中の事においては、秀衡泰衡の先例に任せ其の沙汰を致すべし」と認めた一紙を置いていくほどの念の入れようであった（『吾妻鏡』文治五年十月一日条）。

さらに頼朝は、奥州の所務を担当させるべく現地に残してきた葛西清重を通じて窮民救済策をうちだす。軍費を現地調達するのが普通であった当時において、頼朝の大軍が通過・逗留した地域は疲弊が著しく、その復興が心底のぞまれていたからである。

葛西三郎清重、奥州所務の事を仰せ付けらるるに

依り、還御の時供奉せしめず、彼の国に留まる所なり。仍つて今日、条々を仰せ遣はさるる事有り、先づ国中に、今年稼穡不熟の愁ひ有るの上、二品、多勢を相具して数日逗留せしめ給ふの間、民戸殆ど安堵し難きの由、聞食すに就き、平泉辺、殊に秘計沙汰を廻らし窮民を救はるべしと云々、仍つて岩井、伊沢、柄差、以上三ヶ郡は、山北方より農料を遣はすべし。和賀、部貫両郡の分は、秋田郡より種子等を下行せらるべきなり。近日、則ち沙汰有るべしと雖も、当時深雪たるに依り、其の煩有るべきか、明春三月中、施行せらるべし。且は兼日土民等に相触るべし者。

『吾妻鏡』文治五年十一月八日

平泉周辺の窮民を救うため、岩井・伊沢・柄差（現在の岩手県北上盆地付近）には山北（現在の秋田県仙北地方）より農料を、和賀・部貫（現在の岩手県中西部）には秋田郡（現在の秋田県中西部）より種子を調達させることによって、次年の収穫を保障しようとした。しかし今年の冬は「深雪」により困難であるので、明春三月中に実行にうつすことを決定し、農民たちにその旨を伝えたのである。

後にもふれるが、奥羽両国の管領を朝廷側に正式に認めてもらうよう頼朝は院へはたらきかけていた。その結果は、頼朝の要求どおり明春にもたらされる予定

となった（『吾妻鏡』文治五年十二月一日、二十六日条）。頼朝にとって、なんとも待ち遠しい春となったのである。

二 降人の処分

頼朝は、泰衡追討宣旨をみないまま奥州へ出陣した。七月十九日付の追討宣旨がようやく頼朝のもとにもたらされたのは、おくれて九月九日のことであった（『吾妻鏡』同日条）。頼朝は、九月九日になってはじめて追討宣旨が下されたことを知るのである。すでに泰衡はこの世になく、院へ戦勝報告をするための使者も鎌倉を出発していた。

それまで頼朝は、追討宣旨が下されていないことから、泰衡を相伝の家人と位置づけていた。「泰衡は、累代御家人の遺跡を受け継ぐ者なり。綸旨を下されずと雖も、治罰を加へ給ふ、何事か有らんや」といった大庭景能の言に出陣を決意し（『吾妻鏡』文治五年六月三十日条）、泰衡の首を得た後も、「須らく其の首を進ずべく候と雖も、遼遠の上、指したる貴人に非ず、且は相伝の家人なり、仍つて進ずること能はず候」と、あくまでも自身の家人であることを強調していた（『吾妻鏡』文治五年九月八日条）。自分の家人を滅ぼすのであるから、自己の裁量の範囲内というのである⁽²⁾。

しかし泰衡追討官旨が正式に下されたことを知った以上、とくに泰衡と血縁にあたる降人の扱いについては、頼朝の裁量の範囲内というわけにはいかなかった。

俊衡法師並びに季衡等、降人となりて出来し候、折紙に注し謹みて之を進上す、其の中、俊衡法師は、年齢高く候の上、法花經を受持せしむるに依り、本の住所を宛て給はりて安堵せしめ候所なり。其の外の輩は皆、召し具して鎌倉へ上道すべく候、而るに其の後、京都に進ずべく候か、又、相計らひ候て関東住人などに預け給ふべく候か、何様沙汰せしむべく候や。

〔吾妻鏡〕文治五年九月十八日条
頼朝は一応、降人の処置について朝廷側の判断を仰いだのである。十一月三日、院からの返事が届いた。

奥州降人の事、

只、計らひ沙汰すべきなり。但し公家の御沙汰たるべきに於ては、京都に進ぜずと雖も流罪官符を下さるべきか。重ねての申状に随ふべし。

〔吾妻鏡〕文治五年十一月三日条

頼朝はたいへん悦んだ。自分の目の届かない京都へ平泉藤原氏の血をひく者を送らずとも済む上、囚人の処置については全面的に頼朝に任せるという内容の文書をかちとったからである。流罪官符についても頼朝

の意向に任せるといっているのであるから、悦びはひとしおであった。

年の瀬もさしせまった文治五年十二月、頼朝のもとに院宣が届く。それは、奥州合戦の勳賞を行うとの内容であった。しかし頼朝は、これを固辞。やはり関心は、奥羽の支配権を正式に朝廷側に認めてもらうこととともに、降人の処分にむけられていた。

泰衡征伐の事に依り、猶勳賞を行はるべきの趣、中納言経房の奉りとして院宣到来するの間、重ねて辞し申さしめ給ふ。但し奥州羽州地下管領の間の事、明春御沙汰有るべきかの由、之を申さる。又、降人等の事、配流官^(マヤ)府を下さるべきの趣、一紙に載せ同じく言上し給ふ。此の事に依り、今日飛脚を立てらるるなり。

相模国 高衡〔預くべきの由、先日申上げ候ひ
訖んぬ〕 師衡 経衡 隆衡〔御定を
相待ち、召置き候〕

伊豆国 景衡

駿河国 兼衡

下野国 季衡〔当時、人に預け置き候許なり、
在所に依るべからざるか〕

件の輩、当時の在所に依るべからず候か、只、其の国を定め下さるれば御定に随ひ配し遣はすべく候なり。

『吾妻鏡』 文治五年十二月六日条。□内は割注。以下、同じ。

四人を各国の御家人に預けた上で、ここでもまた配流先について朝廷の意向をうかがう姿勢をみせた。

ところで、ここで検討しておきたいことがある。相模国に囚らわれの身となっている降人のなかに「高衡」と「隆衡」の両名がみえるからだ。両者は別人なのだろうか、それとも『吾妻鏡』の誤記なのだろうか。

近年、秀衡四男の藤原隆衡が注目されているので、この隆衡については少々、詳しくみておきたい⁽³⁾。

平泉藤原氏一族のなかには、同名の別人が存在している例がある。忠衡という人物である（後掲、略系図参照）。一人の忠衡は、源義経に同意したとして兄である泰衡に殺されてしまった秀衡三男の忠衡である（『吾妻鏡』 文治五年六月二十六日条）。もう一人の忠衡とは、河北忠衡のことである。河北忠衡の父は、志波郡比爪館（現在の岩手県紫波郡）を本拠地としていた樋爪俊衡で（『吾妻鏡』 文治五年九月四日条）、『尊卑分脈』は俊衡について「秀衡の舍弟なり」と伝えている⁽⁴⁾。つまり河北忠衡と秀衡三男の忠衡とは従兄弟の關係にあたる可能性がある。河北忠衡は、奥州合戦の際に父俊衡とともに頼朝の軍門に降った（『吾妻鏡』 文治五年九月十五日条）。

忠衡の例をふまえると、やはり隆衡（高衡）を名乗

る人物が一族のなかに二人いるとみるのが妥当であろう。問題は、その二人が誰なのかということである。

まずは、筆頭にあげられている「高衡」の方から考えてみることにしよう。手がかりは、「預くべきの由、先日申上げ候ひ訖んぬ」という割注の文章である。この割注は、「高衡」については先日、御家人に預ける旨を申し上げました、といった内容が記されている。

そこで「先日」とあるので、十二月六日から少々さかのぼって、先にもふれた頼朝が降人について京都に報告した『吾妻鏡』文治五年九月十八日条をみてみよう。すると次のように記されている。

秀衡四男本吉冠者高衡、降人となる、下河辺庄司之を召進ず、

秀衡の四男、本吉冠者高衡は投降した。頼朝は、降人の処置についての判断を仰ぐべく折紙に注記して京都に進上した。折紙に記された人物は以下の通りである。

本吉冠者高衡（秀衡法師四男）、比爪俊衡法師男三人（大田冠者師衡、次郎兼衡、河北冠者忠衡）、比爪五郎季衡（俊衡法師舍弟）、男新田冠者経衡、この朝廷側への報告が、「預くべきの由、先日申上げ候ひ訖んぬ」と記された内容の具体的な中味であると思われる。

『吾妻鏡』 文治五年十二月六日条が、相模国に囚ら

われの身となつてゐる人物の筆頭にあげている「高衡」とは、藤原秀衡の四男、本吉冠者高衡＝藤原隆衡とみてよさそうだ。

それでは、もう一人の「隆衡」とは誰のことであろうか。『吾妻鏡』をめくっていると、文治五年六月十三日条に、それと思われる人物が出てくる。

泰衡の使者、新田冠者高平、予州の頸を腰越の浦に持参し、事の由を言上す。

従者をしたがえ、義経の首を鎌倉まで運んだ泰衡の使者である新田冠者高平こそ、囚らわれの身となつてゐる、もう一人の「隆衡」ではないかと推測される。この推測が正しいとするならば、新田冠者高平も、泰衡と血縁関係にある、かなり近い人物とみて間違いないだろう⁽⁵⁾。

十二月十八日、配流官符が正式に下された(『吾妻鏡』文治五年十二月二十六日条)。各国の御家人に預けられた囚人が、その後、どのような生涯を送つたかは定かではない。平泉藤原氏直系の藤原隆衡は、その後、城氏の乱に加担したとして殺された(『吾妻鏡』建仁元年三月十二日条)。季衡については、囚人の身ながら下野国宇都宮社の職掌に任じられた可能性がある(『吾妻鏡』文治五年十月十九日条)。師衡については、『尊卑分脈』によれば、本領を安堵された父俊衡とは異なり文治五年に殺されたという。

以上みてきたように、平泉藤原氏の降人の処分をめぐつては、泰衡追討宣旨が下されたことに端を発する頼朝と朝廷側との一連の交渉をふまえなければならぬ。形式的とはいえ追討宣旨が下された以上、処分にあたり流罪官符は必要であつたのである。

おわりに

奥羽両国の管領についての正式な許可を朝廷側に要求し、その承諾を得ながら降人についての処置もほぼ自身の思惑通りにすすめていた頼朝にとつて、「深雪の期」である文治五年冬は一見、静謐であるかにみえた。しかし、十二月二十二日夜、奥州より急を告げる飛脚が鎌倉にやってくる。源義経のみならず、源義仲の子息さらには藤原秀衡の子息等までもが同心して鎌倉を目指して攻めてくるというのである。ただならぬ雰囲気を感じた頼朝は、「深雪の期」とはいえ御家人に警戒する旨を命じる。出羽国にはじまる大規模な反乱、大河兼任の乱の予兆であつた。

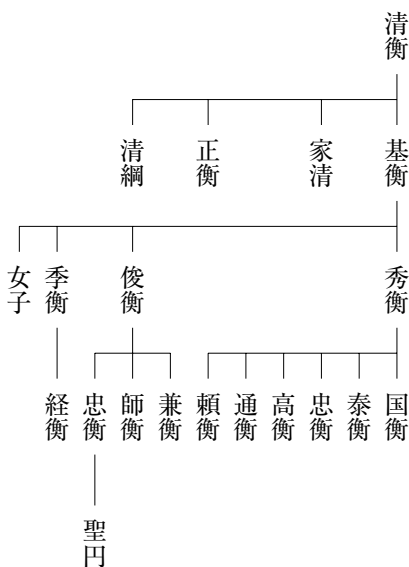
以上、奥州合戦の戦後処理について、①出羽国への対応、②降人の処分、の二点に焦点を定めて素描をこころみた。先学の成果に大きく依存し、ほとんど新たな知見を生み出すことはできなかった。今後とも、中世奥羽の歴史について先学の成果に学びつつ研究して

いきたい。

註

- (1) 小論が参照した主な参考文献は以下の通りである。大石直正・入間田宣夫・遠藤巖・伊藤喜良・小林清治・藤木久志『中世奥羽の世界』（東京大学出版会、一九七八年）、『図説秋田県の歴史』（河出書房新社、一九八七年）、入間田宣夫『中世武士団の自己認識』（三弥井書店、一九九八年）、『秋田市史』（第二卷中世通史編、一九九九年）、大石直正『奥州藤原氏の時代』（吉川弘文館、二〇〇一年）、『秋田県の歴史』（山川出版社、二〇〇一年）、伊藤清郎・山口博之編『中世奥羽の領主と城館』（高志書院、二〇〇二年）、白根靖大『本吉冠者・藤原隆衡と大河兼任の乱』（羽下徳彦編『中世の地域と宗教』吉川弘文館、二〇〇五年）、関幸彦『東北の争乱と奥州合戦―「日本国」の成立―』（吉川弘文館、二〇〇六年）など。
- (2) 以上、入間田宣夫『鎌倉幕府と奥羽両国』（前掲『中世奥羽の世界』）。
- (3) 前掲白根論文。白根氏は、大河兼任の乱の目的が囚われの身となっていた藤原隆衡の奪還にあったとする説を提起している。
- (4) 『尊卑分脈』は、「或本、此くの如し」として秀衡と俊衡とを兄弟として結ぶ系線を注記している。

- (5) 前掲白根論文は、「新田冠者高平」＝秀衡四男藤原隆衡であるとした上で、義経の首を運んだ使者としての役割の重要性を強調している。小論は「新田冠者高平」を秀衡四男とは別人の「隆衡」に比定した点、白根氏とは見解は異なるが、氏が評価した通り「新田冠者高平」の使者としての重要性は強調されてしかるべきであろう。



平泉藤原氏略系図
 (『尊卑分脈』により作成)

活動報告(平成十九年九月一日〜同二十年八月三十一日)

○平成十九年

十月二十五日 雪国民俗館見学(城東中学校生五

名)

三十一日 『雪国民俗(三十二号)』発行

十一月 十五日 所員・地域情報協力員との会議

二十日 村越謙一氏 民具寄贈(石臼・洗濯板・米選別器各一点)

二十二日 雪国民俗館見学(由利・本荘市工

芸組合二十三名)

十二月 大学ホームページへ展示案内(1)

(大沼の箱形くりぶね)

○平成二十年

一月 七日 小松萬毅氏、人形一体寄贈(子吉

平野地区の農作業着姿の人形)

十一日 民俗学講演会・パネルディスカッ

ション(大学大会議室)

大学ホームページへ展示案内(2)

(農作業用かぶり物)

三月二十一日 雪国民俗館所員会議

二十五日 雪国民俗館見学(本学理事長・理

事四名、本学職員三名)

二十九日 民家見学(地域情報協力員・須田

俊夫氏の案内・鵜養地区)

大学ホームページへ展示案内(3)

(用心縄)

四月二十三日 雪国民俗館見学(学外者一名、学

内者一名)

五月 一日 雪国民俗館見学(学内者四名)

大学ホームページへ展示案内(4)

(踏俵)

八月 八日 週刊アキター雪国民俗館紹介

六月 十九日 雪国民俗館所員会議

大学ホームページへ展示案内(5)

(押絵)

七月五〜六日 学園祭(雪国民俗館開放、二日間

の見学者九十一名)

八月 大学ホームページへ展示案内(端

縫い衣装)

編集後記

・「雪国民俗（第三十三号）」が刊行となった。昨年
に続いて講演会・シンポジウムの内容が骨子になっ
ている。シンポジウムでは、男鹿市の観光振興策の
あり方などにかなり鋭い質問があった。シンポジウ
ムはたくさんのご意見があるのでとても刺激にな
る。

・本年より新たに二名（村中孝司先生、渡邊俊先生）
所員が増えた。それぞれ植物学と歴史学をご専門と
している。両者とも民俗学と隣接する学問領域であ
る。今後ともそれぞれの視点から論文が寄せられる
ことを期待している。

・ところで男鹿観光案内所に高さ十五mほどの巨大
ナマハゲ（二匹）の立像が、観光客を歓迎している。
ご幣をもち腰に太い綱を巻いた様相をしている。男
鹿市役所内のナマハゲ、ナマハゲ館のナマハゲも同
様な姿をしている。確かにこれは一部の地区のナマ
ハゲのスタイルだが、やがてこれが男鹿のナマハゲ
の様相として定着するのだろうか。

（鎌田）



パネルディスカッションの1コマ

◆執筆者紹介

(掲載順)

鎌田 幸男

ノースアジア大学
総合研究センター 教授

雪国民俗館 名誉館長

菅原 正幸

男鹿市産業建設部観光課 課長

石郷岡 千鶴子

秋田県民俗学会 事務局長

平 辰彦

秋田栄養短期大学 准教授
雪国民俗館 館長代理

村中 孝司

ノースアジア大学 講師
雪国民俗館 研究所員

渡邊 俊

ノースアジア大学 講師
雪国民俗館 研究所員

◆編集委員
橋元志保

◆編集協力
相原 恵

雪国民俗 第三十三号

平成二十年十二月二日 印刷
平成二十年十二月五日 発行

編集 雪国民俗館
発行 (ノースアジア大学総合研究センター内)
発行 ノースアジア大学
〒〇一〇一八五一五

秋田市下北手桜字守沢四六一
TEL 〇一八一八三六六五九二
FAX 〇一八一八三六六五三〇
秋田協同印刷(株)
〒〇一〇一〇九七六

秋田市八橋南二丁目一〇一三四
TEL 〇一八一八二三七四七七
FAX 〇一八一八二四一二八六四